古史傳

十五

125
34
111

古史傳

自第六十七段
至第七十三段

十五

東京圖書館
和書門
國史類
六面
一架
號
一冊

128
36
3

東京帝國大學圖書館藏

古史傳十五上卷

平篤胤謹撰

男　鐵胤
孫　延胤　續攷

神代中七上卷

七十六

爾其子五十猛神。亦云伊太祁曾神。亦名大屋毘古神。初天降上時。多將樹種而下坐矣。雖然不殖韓地。盡持歸

而始自筑紫島而大八洲出国内悉播殖而成青山矣所以稱五十猛神而謂有功出神即坐木国大神是也此神出妹大屋津比賣命示云大屋次抓津比賣命示分布木種矣故此二柱神示奉渡於木国即木国造出齋祠神等也五十猛神示謂韓神曾富理神此者坐宮内省神也

五十猛神。おた舊訓ふ從て。伊曾多祁流と訓ばし。八十建おど云例も有り。はと伊多祁流とも訓べきう。日本紀ふ伊と云ふふ。多くた五十を書きまだおり。示名を伊太祁曾と云なも思ふべし。荒び建び給ふ由の御名おり。○伊太祁曾神。御名義。出雲国仁多郡ふ。伊我多氣神社ためり。此を杵築大社記ふ。伊我多氣大明神た。五十猛神是れり。と有り。然れど伊た嚴の省語ある。太祁は猛曾は熊曾れ曾と同じく。此も建きをいふ語れり。第八段。熊曾国の下見るべし。又若くた。曾た佐乎の切りふて。五十猛有功神ふた非ざる。う。おれ此御名れ事た。師説もためり。下ふ注ばし。○大屋毘古神。おれ神やゞて禍津日神ふて。示名を大綾津日神やも申して。綾とた禍の義ふはゞの。大綾れ阿多省て大屋

と云ふ。委くた下第二十七段の傳ふ註ばし。○初天降之時とた。前ふ須佐之男命と共ふ。降坐る時を云ふり。○多將樹種而下坐た。纂疏ふ。樹種可樹藝草木之種子也とためり。然も有ばし。諸穀物の種。諸菜れ種。諸菓物の種。まさ桑麻おど。其おう多かるべし。皆樹藝ぞてた。得有まじき物どもれり。天上れふ種くれ木種を將下り給へる由おり。抑木草は。国土の成きると共ふ。蘆桃おどれ如く。希ふ生ある もあれど。多くた稚産靈神の産靈はと其御子豊宇氣毘賣神れ奇魂。木神野神れ産靈ふ成出ある中ふ。止事おれ木草の種た。悉く天御国ふ有れむを。此時將降らして殖給へふを。世ふ無て叶た如種くの木草れ。生茂れる事

を知られあり。大凡世に無て叶はぬ木草は、皆皇国に生ずるを、本草家おのゝ云倫も、おのゝ知り尽さとは絶てなしと能はれば、藥に用ふる木草おゝぜ、此渡らぬは何してまし思ふも有ばなれども、今まで此方に無き物と思へるも、次々ぶいと數出來れず、能く探求ては、遂に無て叶はぬ物ども、遺おく出來べくぞ思ゆる。まさ何の道もかく開けさるに合せて、医藥の方れみいはゆる古風れ開々ざるは、豪傑と云る人の出來て、なく其道を明らとも事欠むよりは、今まで用ゆる藥れ中に、其渡らばとて、蕃国くざる物も有ると出來ば、但しかく言ずとて、蕃国くれ物を忌み用ひぬと云ふは非ず、然るは皇神さちの御心と、此国に生る物は、悉く外国くをう貢奉らしめて、皇国の要と為さるふ御定めの有れば、おり、其は神功皇后、巻に委く云べし。○不殖韓地盡持歸

韓地とは西に有る国くを總て云ずは、不殖持歸とは、かれ国くは、淳沫の凝成れ、に国ある故に直をうに生藝では、要を成ざる木草どもれ生茂はまじき土性ある事を知

看して、持歸は給へば成ばし。天壁立極み廻り坐る事は、もむ。ちて外国くに多うる木草どもは、此後に大汝小汝神れ、彼国くを造營給ふ時に、土性に相應ふばき木草どもを殖布し給ふるも有ばく、はと二柱神の国巡は給ふ時に、出雲国多禰里に稲種の墮と有事。此事は第九十一段に出とり。

まあ西戎国にても、神農と云ける王れ時に天をは粟れ降さを殖付ありをも、云ひ傳ふに事れどのあるに合せて思ずは、天津神の種を降し賜ひれむも知ばらば。今も種くの種は空をり降る事は、時くにの事あり。大凡西に有る国くは生に木草どもは直朴おらぬ中に木は、惡固く希に堅のらぬ木も有れは、甚もろくて良材おらず、其は唐木とて渡り來る木は、多く彼国くの家作に用

ひとる古材あるを、其木質を見て、惡木ある事を知べし。奇南香、紫檀、黑檀、イスおど云、木ども、小けき器械おどお作りてこそ、珍しくも見ゆれ、家も何の要とも有らぬ木どもせりし。○筑紫嶋も上お出と卍。第八段見べし。神代口訣お、肥前國西南沖ニ有リ五十猛嶋と云へ卍。其は此時御坐せる地おどよや。神名式お、筑前國御笠郡筑紫神社名神大。とあの社の祭神を、五十猛神おめと、貝原氏の和爾雅お見えとめ。此嶋を卍事始めて。大八嶋の國内悉く。樹種を生し給ふれど。此處お、も御靈を鎮ふぢき事ぞかし。此社の起も、筑後國風土記お、昔荒ぶる神有て、多お人を殺し給ひしかば、其神を、人命尽神と云へるを、後お祝祭りて、筑紫神と申奉とあり。是筑紫を いふ國名の起お卍。此も社を卍始給ふ。其社れ、れき事を御怒め坐ての態おるべし。餘神神おも例ある事あり。さて此社も、清和天皇紀貞觀元年正月授ニ従五位下筑紫神ニ、従四位下と見え、陽成天皇紀元慶三年六月授ニ従四位下筑紫神ニ、従四位上ニとあの卍。今も御笠郡筑紫村の内原田村の北ある林中の高き処お、南向お坐せり。筑後肥前お近き処れりとぞ。第八段筑紫の下、まと第七十四段竈神れ処おも注ふを見べし。

○成青山矣は。前お須佐之男命れ。枯山おゝ泣枯し給ふ山くを悉お舊の如くお木種を播殖て。青山と成給へる由おゝ卍。○稱も多く倍と訓ぢし。○有功之神も。今本お、イサヲレノ神と訓とまど師の伊佐遠能神を訓まと、ふお從ふぢし。江家の点を云を加へ、とる本まも、イサヲノカミを訓卍。然るは類聚國史お、伊佐乎之久と見え。日本紀竟宴歌お、伊佐袁志久正し。如道のおむりし。云くれど有る故て。伊佐袁志を云を、體語と心得ふお、も有げおまを。志も用のし云ふ

詞ゐて。伊佐袁と云ぞ本語ゐゆける。其は同竟宴歌ゐ。得天穂日命草木みゐ言止をとて葦原の。国ゑ立ゐし夷装嗚ゐ。ひれめ。と詠て。其語書れ中ゐ。こゐいむくあまのわひれこゐを。これ。ゥみのいさをれめ。云くと有ア。此れ日本紀ゐ。余曰。天穂日命是神之傑也云くとある文を仮字ゐ書とるゐて。いさをれりを。傑也ゐ當れど。古訓イを然ぞ有けむを。今本ゐを。傑也と訓ゐり。これ後の訓ゐおそ。是を以て。伊佐袁能神と訓べき由を辨ふ。ゑし言義を勇雄ゐらむ。紀中功字を。イサミぎも訓ア。然るゐ伊佐袁といふ語を功字德字れどの義と思ひ打任せて然言むこゑ。義を違ゑれど既ゐ有功字を伊佐袁とも伊佐袁とも。體言ゐ訓來ゐきど。功德ゐどれ字をゐゥ訓

むも。今を非とは云がゐし。○坐木国大神是也。木国は名義此字の如し。紀伊と書を。必二字ゐ定むばしとの御制ゐ因て。紀音の韻れ伊を添さるゐり。此例多し。右れ如く木種を分播ゐ万ふ神の坐ゐ故ゐ。木国とを名けしゐり。神名式ゐ。紀伊国名草郡伊太祁曽神社。名神大月次相嘗新嘗。とある大神是ゐア。文德天皇紀ゐ。嘉祥三年十月。紀伊国伊太祁曽神。従五位下と見え。清和天皇紀ゐ。貞觀元年正月。従五位下伊太祁曽神。従四位下。陽成天皇紀ゐ。元慶七年十二月。伊太祁曽神。従四位上ゐど有ア。當国の神名帳ゐ。正一位勲八等。伊太祁曽大神と見也。国史後の書等ゐ。諸国の神等ゐ。一階ゐ〳〵上。給ゑるゐを數〳〵有を。遂ゐ正一位ゐ上ゥ給ひれむこと然も有ばし。さて此社は。南紀名勝志ゥ。東庄伊太祁曽村の西北一里許ゐ有ゥ和銅

正平承久明應年中の綸旨あり其内和銅に紛失安延元の奉書ゐ當國一宮伊太祁曽と書ゐとゐゐ一宮記ゐは名艸郡日前國懸宮と有て祭神に天兒屋命孫石凝姥と見もれど信ゲとし第四十五段の傳見合安べし さて扶桑略記ゐ延喜六年四月七日授紀伊國從五位下伊太祁曽明神從五位下とあるに誤ゐり師云伊太祁曽の曽を契冲の魯字の誤ゐらむと云しに一ゐとり然もと聞もれど ゐは思ゑずゐろし此に五十猛有功神と云ゐゐ佐乎を切むきバ曽とれるゐり故國史まと和名抄れどゐも みゐ曽とありまと國人も然云り但し國人の祁を伎と云れるに誤ゐゐ ○此神之妹大屋津比賣命亦云大屋毘賣神 ゐは妹ぞは有れど眞の妹ゐ非ぞ はと御妻ゐも非ぞ決定て速秋津比古神に妹速秋津比賣神と同類ゐて五十猛神の分身ゐらむと思も 風神志那都比古神の次ゐ志那都比賣神ゐ同じ 例の神等いと數多ゐり其に五十猛神やゲて大禍津日神ゐて亦名殘瀬織津比賣神とも申して女神ゐも坐はし大綾津日神とも申せば大屋津に大綾津の阿を省と ゐゐゐ 師說ゐ桟の用に舍宅を造るを主と安る故ゐ大屋てふ御名ハ賜給ゐらむと有れぞ然らば はゐ五十猛神を大屋毘古神とも申ゐゐ此女神をまと大屋毘賣神と申ゐゐ思ひ合せて辨ふ法し 凡て斧き神等ゐに男神ゐり と思ふゐ女神ゐるあり女神ゐりと思ふゐ男神ゐるゐゐゐまと一柱ゐりと思ふゐ二柱三柱ゐも身を分ち二柱三柱ゐ坐安神の一柱ゐ身を合給ふもあり まと男神ゐに去て分身に女神ゐるゐゐゐ此等の事ども に第九五段第六十四段第百九七段ゐぞゐ次く考へ記安を見べし ちて和名抄ゐ名草郡ゐ大屋鄉ゐ有に此神の御名を ゐぞ出けむ ○桙津比賣命御名義いまゞ思得安 師說ゐ此に材ゐを れる御名ゐり桙字に四

方木也と字書に見ゆ。万葉、哥に、眞木さく檜の嬬手とあるこれ。然るに抓と作るは誤なり。とあれど、説得られしやも所思ふ。

○分布は。上に播殖といふ文にあり。其を受て示と有まぼ。此も麻伎宇恵ゆ訓ばし。本に分布と訓み。師は分布ゆ訓れとり。其も共に惡らば。

○此、二柱、神示奉渡於木国に。五十猛神と三神共に。木種を分布し給ふる故に。木国に遷渡し奉れ依由あり。神名式に。名草、郡伊太祁曽神社に並ばて。大屋都比賣、神社。名神大月次新嘗。都麻都比賣、神社。名神大月次新嘗。とあり。右三神社。本は一所に坐しまや。文武天皇、紀に。大宝二年二月分遷伊太祁曽、大屋都比賣、都麻都比賣、三神社、とあり。和名抄に。名草、郡に。大屋津麻伊太祁曽おどいふ郷名あり。

大屋津姫、神。都摩都比賣、神。從五位下。貞觀元年正月。從五位下大屋都比賣、神。從四位下おぞあり。南紀名勝志に。大屋都比賣、神社は平田、庄宇田森村の東北一丁許に。大屋大明神あり。當国の神名帳に。從一位大屋、大神とあり。都麻都比賣、神社は名勝志に。山東吉礼村は中にあり。都麻都比賣、神とあり。見え。當国の神名帳に。從一位上都麻都比賣、大神。まさ妻之御前、社は山東、庄平尾村の中にあり。土人相傳て。此神は伊太祁曽、神の妻なるに依て。神事を伊太祁曽、社の社人勤むと云へり。まさと或説に。机津姫と云は此社なり。吉礼村なる。拠おしと云へり。考證には。今在吉礼村とあり。さて從一位上とある一、字は。四の誤なり。

して此三柱、神を。何處ゆ誰ゆ木国に遷渡し奉れ依と。考ふ依に。須佐之男、命は。出雲国に御坐せるに。彼、神に屬て坐せる神等なまぞ。共に出雲国に坐けむと決おし。斯、有ば師説の如く。須佐之男、命の。彼国ゆ渡奉ゆ給ふ依也々ゆ。師説に出雲と木国と同く通ふる事多

し。また熊野てふ地名二国ありまと意宇郡韓国伊達神社名草郡加太神社おれらみお牟婁郡熊野速玉神社まと意宇郡速玉神叱伊達神社大原郡加多神社出雲国と迂渡坐し時同名ありて此皆右の三神社に須佐之男命の三神の由縁あるべし奉渡とむ給ふおりとあり。

神名式。出雲国意宇郡ふ。韓国伊太氐神社。

此れ王作湯神社の同社ふ坐せり。谷川氐云伊太氐或は伊達と作ると云へり。師の上ふ引れとるふも伊達と有きバ。然は本も有れるふおそ。韓国としも冠とるれ韓ふ渡りて帰り坐は神ふきだおり。其れ豊前国田川郡ふ。辛国息長大姫神社と云あり。此れ息長足比賣命の韓を伐て帰り坐る由をもて。辛国云く。と白れと聞もるをも思ひ合せべしまと大隅国嚬唹郡ふ。韓国宇豆峯神社と いふあり。此も韓ふ由ある神社ふ。言れまくも更ふおり。

はと韓国伊太氐神社。

此れ佐久多神社揖屋の同社ふ坐せり。

はと韓国伊太氐神社。

此れ曾枳能夜神社の同社ふ坐せり。

出雲郡ふ。韓国伊太氐神社。

これ出雲神社の同社ふ坐せり。

はと韓国伊太氐神社。

此等みお伊太祁曾神を祭れる社ゝ。其は韓国と れ。彼国〻を廻り給ふる由なり。伊太氐は。伊太祁を通ひて聞もれば。谷川氐も早く韓国伊太氐神社。蓋此神也と云へり。拠有しふや。

はと神名式ふ。紀伊国名草郡ふ。伊達神社。名神大

とあるも。同神れ社と聞え。和名抄ふ同郡ふ。伊太郷あり。此社れ国史ふ。

承和十一年十一月。奉授紀伊国従五位下伊達神正五位下。嘉祥三年十月。紀伊国伊達神加従四位下。貞観元年正月。奉授紀伊国従四位下伊達神正四位上。同十七年十月。紀伊国正四位上伊達神授従三位。おと見も。南紀名勝志ふ園部村の

東ゑ園部神社と云あり是おりと云ふ和名抄ゑ苑部郷を云ふ今の園部村ゑるゑ。まと式ゑ伊豆国賀茂郡ゑ伊太氐和氣神社を云ふゑも同神ゑ。此社を国史ゑ仁寿二年十二月加伊豆国伊太豆和気神従五位下○伊豆仰本駿河とあり今を一本ゑ依れり伊太豆の豆字一本氐とゑ正まと斉衡元年六月加伊豆国伊太豆和気神従五位上とあり其を同郡ゑ杉桙別神社と云ふゑ。此を伊豆誌ゑ五十猛神を祀る由見あれど外正。伊豆志云当郡田中村ゑ木宮明神ゑり五十猛命を祀るこれ杉桙別命社ゑり川津十七村の総鎮守ゑり慶長の札ゑ木野大明神とゑり祠傍れ樟樹十三抱許外れり膳八れ大樹二株あり末社ゑ小島と云あり当社を伊豆納符の中ゑも出と正まと同郡八幡村ゑも木宮明神ゑり大見十六村の総鎮守ゑり正保二年れ棟札ゑ貞和中藤原朝臣祐義公新宮殿造立とゑりまと那賀郡熊海村ゑも木宮明神あり此をも五十猛神と称ゑと正。陸奥国色麻郡ゑ伊達神社名神大とゑるも同神ゑゑ

ゑ決ゑし。色麻郡を和名抄ゑも出て其郡ゑ色麻之加万といふ郷もあり兵部式ゑ色麻駅見ゑ観跡聞老志ゑ今作四竈為加見郡邑とゑりさて今伊達郡と云を延喜式和名抄拾芥抄ゑぞゑ見えゑ環翠軒の節用集ゑ見さり此を後ゑ此社名ゑも其は播磨国餝磨郡ゑも射楯ゑを此を建さる郡と通兵主神社二座ゑゑ依社の祭神を五十猛神と須佐之男命ゑと物ゑ見え。陸奥播磨ともゑ郡を志加麻といふ孰ゑ本ゑら知ゑと想ふゑ播磨を陸奥へを移しとりれむ当国の名所図會といふ物ゑ此社を移しとり此社を迭井村と云ゑゑあり此社と行矢れ神ゑも云今を姫路の総社ゑ合せ祭る舊を八疊岩ゑ坐せしゑり此と云りゑゑ此兵主神社の事ハ別ゑ委く云べし。此社ゑ並ぶて白国神社といふ有正。ゑを彼新羅を正渡坐るゑ由ゑの正と聞ゑるも思合さゑまばゑ正。白国を斯良伎とも訓べし斯良伎やゑて斯良国をいふ語ゑる由を既ゑ云ゑりき此社のゑと国史ゑ元慶二年六月授播磨国従五位上白国

神正五位下と見えとめ。○木国造之齋祠神等也。木国造は。産巣日神の御子。天御食持命示名手置帆負命の裔にて。宮作れる業を掌れる故に。木国名草郡に住み。遂に国造と任ぜし事。上に委く注すべし。第五十段木国忌部の下見るべし。凡て某々れる国地に坐ける神等をば。其所々を治る国造とぞ。天皇の大御手に代りて。齋祠る古の御制なる事も。既に上に注すべし。第三十九段の傳見るべし。

◉五十猛神を。韓神と申ける義は。韓国伊太氐神とも申ける如く。蕃国々に渡りて。還り給ずれば稱すめ。曾富理神を申ける義は。皇美麻命の天浮橋に蘓理發して。天降坐る山れる名を曾褒里山といふと。須佐之男命。五十猛神の。埴を舟に作りて。渡坐るとを合せて思ふに。皇美麻命れ乘せる浮橋をまと磐船をも云ひて。此事は第百三十七段に委く注ふを見るべし。其は虚空を乘りて往來ける物なれば。五十猛神の乘て渡坐る埴舟といふも。同物にて。其に蘓理發して。渡著給ける故に。曾富理神といふ御名を負坐るにや。師も言れとる如く。曾尸茂梨之処を。石る曾尸茂梨も由有げなれど。尸茂の富と切まる由も無れば。思ひ合せ難し。然まば上の考に從て有べし。あれ思ひ合せ難き事は。石見国迩摩郡磯竹村の内大浦と云る地を。須佐之男命の還り渡り坐る地なりと云傳ふて。大屋村といふ地を。唐神明神社と云あり。祭神を。須佐之男命と云ふ。また其里に。五十猛神社石あり。毎年れ十月に海上くり唐神明神の社前に。れたち大浦に白蛇の上ることと違れば。此を桐箱に納まて。神前に奉るに。杵築浦や。日御埼とに上る物と同じ。大屋村の隣村を。静間村といふ。此に式内静間神社あり。志都岩

屋もおの浦よありと、其国おる門人、霹靂神社の神主、竹内正芳の語ひき、須佐之男命の還渡ませる地ね上よ出ある如く、出雲国安來郷おるを、石見国と云傳ふる事ね いかゞおもど、共ま隣界の国れまぢかくも云ひ傳ゑけむね、然も有ばき事ぞかし。

おホ下ふ註ふを合せ見る法し。○宮内省は和名抄ふ美夜乃宇知乃都加佐とあのまど乃宇を切ゑて美夜奴知能都加佐と訓べし。職員令ふ宮内省管職一。今云、大膳職をいふ。寮四。今云、木工、大炊、主殿、典薬の四寮をいふ。司十三。今云、正親、内膳、造酒、鍛冶、官奴、園池、土工、采女、主水、主油、内掃部、筥陶、内染の十三司をいふ。卿一人。掌出納。謂、被管諸司之出納也。諸国調雑物。春米。官田。謂、供御稲田分置畿内者名為官田也。及奏宣御食産。謂、奏者官田園池、當年所佃種色目、并収穫多少、及氷室氷之厚薄、皆申奏之也。宣者、若有勅語者、更傳宣告也。諸方口味。謂、除調雑物、外諸方別献、珍味是也。事。大輔一人。少輔一人。大丞一人。少丞二人。大録一人。少録二人。史生十人。省掌二人。使部六十人。直丁四人とあの卍。宮内省式と合せ見て。其掌る趣を知ばし。かく厳重ふ定まれるね、孝徳天皇の御代を卍ど、考徳天皇をり以前よも、宮内省といふ名こそ無れ、かかる職掌の有れむ事ね、開題記よ委く論へるを見べし。次く、文武天皇の御代まで卍ふ制られとはあきハ省ね中ふ。此省ばゝ卍。被管の諸司ね多如ね形し。神名式ふ。宮内省坐神三座。並名神大月次新嘗。園神社、韓神社二座とあの卍。国史よ。齊衡元年三月。園神、韓神竝加従三位。同二年九月。以園韓神列官社。貞觀元年正月。宮内省、従三位園韓神。竝正三位おど見も。御祭ね二月と十二月との丑日ふ園韓神祭とて行ね、給ふ春用春日祭、後丑冬新嘗祭前日と式ゝ見も。神祇官人祭ね事よ預卍。上卿、辨内侍おぞ参り勤むるこそ。貞観儀式、延喜四時祭

式西宮記北山抄江次第ホ
ど其外の書等ホ見えとり此を宮中ホ齋祠ヒ給へ侯事
は内侍所御神樂式ホ韓神之事素盞雄尊子也有帝基安
泰之誓故宮中祭之と有れど何れ御世といふ事知ぢゝ
らじ然れど令を御撰ありし始をヒて猶舊らるべき事
て言はくも更ホ有りさて韓神を古事記ホ大歳神の
御子と云るホ此式ホ素盞雄命の御子と云る事いと珍
とく正しき傳ホヒ引く大宗祕府畧記の傳を合せ
考ヲて韓神曾富理神と申ひて江家次第れ頭書ホ件神ハ
五十猛神ホ事を辨ふべし

延曆以前坐此遷都之時遣官使欲奉遷他所神託宣云猶
座此處奉護帝王云ゝ仍鎮座宮内省と云り然れど宮内
省ホ坐ひ事と成しは延曆ホ都を遷されし程をりれ事
ホヒれめ古事談五巻ホも園韓神社本自坐大内跡而遷
都之時造宮之使等可移他所云ゝ于時託宣云

猶坐此処奉護帝王云ゝ仍坐
宮内省内云ゝと見えとり

注進狀ホ大神氏家牒曰園神舊記云件神者守疫神也傳
聞大己貴命之和魂大物主神也案此神園華祇散之時発疫病守護之鎮止之仍云
園神坎園殖艸木之処也集解所謂三枝和雲祭云當社之事也
と見え韓神二座の事れ
太宗祕府畧記ホ韓神者伊猛命號韓神曾保利神と云侯
ホ従ふべし

あの祕府畧記の文伊字の下ホ曾字を脱せるホれ非ざるゝもし舊をヒて曾字ホくれ五
十猛を伊太祁流と訓むれ誤りと訓む證と云ホ安べし然てれ己が五十
猛と訓とるれ誤ありさて文れ意れ宮内省ホ坐ひ韓神
を申ひれ伊猛命を韓神とも曾富利神とも申安其二名
を二座を祭と侯由と通も一神れ兩名ホるを二座と忘
て一社ホ祭れるこを豊石窓櫛石窓神れぞの類ホ右例
有りさて韓神二座の事も大倭神社注進狀ホ韓神者大
己貴命少彦名命也兩神經営天下為顕見蒼生則定其療
病之方或抄云大己貴命少彦名命神記曰昔造葦原中国

訖去往東海今為濟民更示來歸因以号兩神云韓神欽古語外国云韓也と云へるも然る説は聞もまとも歟神祕府畧記の説は拠ばくぞ所思也ゆ偖まと師説ふ神名式ふ伊勢国度會郡園相神社あり此を或書ふ曽冨理神曽奈比く古命大歳神子也と云るか園相字ふ付て園神を思ひとせと云ゆ例の推あてゝも言れとゆゆの如し

ちて神樂譜ふ韓神といふ歌ゆ。其歌ふ本見志方由不。三島木綿ふて伊豆国三島とり出る木綿ふ加太仁止利加ふるべし賦役令ふ東木綿と云ゆれ是ゝ加肩ふ取掛て襷和禮可良加見乃。我韓神之ふて韓神ふる為と云事ふ如くと云意ふり。さて此ゝ可良加見と云ゆ依て韓神を可良加美と訓法しと云へゆも有れぞ加茂翁の言れ如くゆれ哥詞の調ふ依て乃を畧れゆふ畧し難し加良乎支世武也。韓招せむ哉と云るふり。訓れて御神楽式ふ加良於幾座置也とあるゆ加茂の例とゆふ大人れ神遊考ふ論ゆまとる如く非ふり。加良乎支世牟也。言句ふ定り外れく且末の句をかく返し哥ふと古哥れ常ふり。末也比良天乎。八葉盤を

ふり大嘗祭式ふ葉盤比良氐と有ふり。天耳止利毛知天手ふ取持てふり。和禮可良加見乃。本の哥ふ注ふが如し。加良乎支世武哉加良乎支世牟也と

ゆの卍。此二首れ韓招ゆ。空招禱をかけて言ゆふて。招禱てふ言の意ゆ既ふ第四十四段ふ委く云卍。我は三嶋木綿を挂け八葉盤を取持ち捧げて神招禱ゆ法を決免て禱ふ驗あらせむ空招禱は爲じ我れ韓神の如く韓招は爲じと云ひ挂と法ふ卍。

然まバ此神は韓招ゆる神といふ古傳のゆるふ本据きて詠免る歌と通え多卍。躰源抄ふ私云からを免ゆ枯と試楽狐柄家ふて行れ法く時人長枯と萩ゆる萩れ枝を持事ふり是祕藏の事ふりと云ふ付て時ふ語ふ付て時ふ云へ卍。按ふふ此れ。のらをぎての景物ふ持とるふや。

後拾遺集ふ資長朝臣藏人ふ

る侍れる時。園韓神の祭れ内侍ふ催(モヨホ)しとて。祓(ミソギ)せまゐど。此世の神と驗(シルシ)あれば。此世の神とは。此国の神と云はむが如し。それから神ふ祈らむと云て侍けば返事(カヘリゴト)ふと免ぬ。少将内侍。近きゞ

ふ紀の媛禊(ミソギ)を何うそれから神(カミ)までは遠く祈らむとてのはも。全(モハラ)韓国の神と爲と趣(サマ)ふ。まと辨内侍日記は建長三年十月十六日新大納言実房夜番ふ参りて例の番ふどはおのれらふ参りて。しとも参り給ひ免るは。いと淋(サビ)しく候ひ給ひしふ。きゝみ〳〵の程ふ多〳〵ふ免みて。れの免ふらば見返ふとる吉ふて。わざとふらぬ何とふき様ふ。韓神をくきわどふ歌ひ出給ひしゆ。少将は許をり。申れらはして侍れゞ。辨内侍(きうむやや)ふ倭ふれあら免のら城きの身ふしむ風は秋ふらゆとも返し。少将内侍(やまとふは)は有ら免物のら韓を紀の。かゆ免ぐ〳〵も猶ぞ和ふ免ま免とてのるも。同じ意むゆ免れ哥れり。

ちて此神の韓招ふとは。何(イカ)ふ爲事を云ふらむゆ考ふはふ。前段ふ。須佐之男命の御語ふ。韓郷(カラクニ)之嶋者。有金銀。於吾兒所御(シラセル)之国。不有浮寶則未住也と詔ゆるは。其荒魂(アラミタマ)大禍津日神亦名五十猛神は御心ふはゞ。凡そ須佐之男命の御態まと御言は。其荒魂の御心御態と。隔ふく察奉るゆき由は。前くふ往く云るを思ふべし。仲哀天皇の御世ふ。神は御誨(ヒ)あゆて。韓国ゆ征(ウチ)給ふゆき由を詔ゆはは。即(チ)須佐之男命は。此御語の結びゆて。其御誨はふ〳〵。韓を征伏(ウチフシタ)ゆ給ひし以來。三韓は更ふ。諸蕃国(モロクカラクニ)くを。種種の事物どもは。參渡ゆ來る事としも成ぬる。其本を云ゆむ。五十猛神亦名韓神曾富理神は。蕃国くを。皇美麻命ふ寄(ヨ)せ給ふ御心を。ゆ起れる事ふまゐむ。韓神の蕃招(カラヲキ)し給ふと云ふ

古語の有れむ事知ぬし。（仲哀天皇卷ふ。委く注を見るべし。）まと因ふ園、神れ事を言はゞ。上ふ引る大神氏家牒ふ。大物主神ふ坐て。疫病を鎮止給ふ由云へれた。（大神氏た、やゞ）宗ふ然るぬし。て大物主神の御末ぬきだ。正き拠ありてぞ記しれむ。其は此神物主と爲て。万れ鬼神を治給ぬば。大宮中ふ。然ぬ邪鬼の入ぬを禁給た（アしきモノ）（トゞ）むふ祭られれむ。（一ヒとヒ理を立て言たむるハ。韓神二座た。園神とり前れ神ふまませず。韓園と序次べきふ。園韓とある た。大物主ふ坐せむぬべし。）殊ふ此大神も。ぬと蕃国（シ）を招て。（マネキ）大皇国ふ寄給ふ事を掌給へだれヒ。（此た崇神天皇卷ふ注ふを見る。ぬ此大神の事。委くた第九十五段。第百二十八段れ傳れどふ。注ふを見て知ぬし。）ちて百錬抄ふ。大治二年二月十四日。園韓神社。神祇官八神殿。幷内外院門垣等燒込云く。園神韓神御正體奉取出之。但後日兼俊宿禰云。八神園韓神自元無御正體。但園韓神有神寶劔桙云く。まゑ長秋記ふ。大治四年三月廿一日參院。仰曰。去夜本院御夢想。有老人。稱宮内省住人申云。近日居住近邊雑人等。亂入甚難堪也。此事可令訪語也。今朝被尋之處。被園幷韓神二社入夢驚申歟。件社燒込後。未突四面垣。仍雑人等亂入とてのヒぬと園大暦文和四年十一月十九日。天陰。園韓神祭社壇顚倒。其後無沙汰。五節又同日無沙汰也見也。（康富記ふ。應永廿六年二月五日。大風。園韓神御社顚倒ともてり。朝野群載ふ。此社。頒ト部宿祢兼宗。社の修造を請申せる解狀もてり。）

爾健速須佐出男命。到坐出雲
国簸出川上在鳥上出地時。箸
從其河流下矣。於是須佐出男
命。於其河上以爲人有而。覓上
往者。河上有啼哭聲矣。故尋其

聲而往上者。老夫與老女二人
在而。中置童女而。撫出泣也。問
給汝等者誰耶。則其老夫答白。
吾者国神。大山津見神出子也。
吾名謂足名椎。妻名手名椎。女

名眞髮觸奇稻田比賣也白矣。復問汝出哭由者何歟則答白我女者自本在八稚女矣爾高志出八俣遠呂智出毎年來喫焉今其可來時出故泣問給其形者如何歟則答白彼目如赤加賀智而身一有八頭八尾亦其身生蘿及檜杉其長度谿八谷峽八尾而見其腹則悉常血爛也白矣爾速須佐出男命於

其老父。是汝出女則。立奉於吾(ソノオキナコレイマシレノムスメナラバタテマツラムニアレ)
哉詔出。答白雖恐不覺御名則。(ヤトノリタマフニマヲセドカシコケレズトシラミナヲバ)
吾者天照大御神出伊呂勢也。(アハアマテラスオホミカミノイロセナリ)
故今自天降坐也答出矣。爾足(カレイマヨリアメクダリマシツトコタヘタマヒキコヽニアシ)
名椎手名椎神。白然坐則恐。隨(ナヅチテナヅチノカミマヲシレカマサバカシコレマニく)

勅立奉矣。(ミコトノタテマツラムトキ)

簸之。師云地名ある也。和名抄ふ。出雲國大原郡斐伊。今本伊を甲と誤る。彼國風土記ふ。大原郡斐伊郷屬郡家樋速日子命坐此處。故云樋神龜三年改字斐伊と云也。是をゆ河ふも名けゝ故ふ也。樋速日子命也。上ふ見とる樋速日神ふり。下ふ云る說あり。考合出ばし。今云樋速日子は簸の川上ふて大蛇を切給へふ由ふて。須佐之男命を申ゆ。又也大蛇の靈を祭れるゆふるべし。師說也信ゲ多し。今云神名式ふ。同郡ふ斐伊神社。こも清和天皇紀ふ貞五位下。同十三年十一月授從五位下斐伊神從五位上と見也。現十年九月斐伊神從

同社坐斐伊波夜比古神社と竝ゞ也。此も風土記ふ。樋社。樋社と竝ばて。在神祇官

也云る社あり。抄に斐伊郷宮崎大明神也と云り。されば樋社二社の中下れ
ばた。式に斐伊波夜比古神と云師の引れあば斐伊郷の
文にも。樋速日子命坐とのまば。祭神知らまあばを。上あ
る樋社を祭神詳ならば。然れども式に。武藏国足立郡に。
氷川神社。名神大月次新嘗 とある社の祭神を。一宮記に。素戔嗚
命とのり。今も其本宮をたゝ言傳あめばと男體宮と
も云ふ。此社を。国史に。貞観元年正月。武藏国従五位下氷
川神。正五位下。同五年六月。授武藏国従五位上。氷川神。従五位上。同
十一年十一月。授武藏国従四位下。氷川神。正四位下。元慶
二年十二月。授正四位下氷川神。正四位上。あど見
も。今も中山道ある大宮駅の傍に。大社にて在り。此国の
国造を。神代紀に。天穂日命。出雲臣。武藏国造等祖也と見

え。国造本紀に。成務天皇に御世に。定賜ふる由見えて。式
に。此国に。横見郡に。伊波比神社。男衾郡に。出雲乃伊波比
神社。まと入間郡にも。中氷川神社。出雲伊波比神社あど
のり。姓氏録に。入間宿禰。天穂日命之後也とのるを。此郡に由のり。此等み外。出雲国に
由ある社を通もばを。出雲国造をめ派とて。此国造と成
きば故に。祝ばば社ある法く覺もばに就て。氷川神社も。
彼樋社を移せる外ならむと思はまを。氷川神社の素戔嗚尊
あばに就て。其本社とる樋社をも。疑ふく此神あらむと
覺もる外とり。神名帳頭注と云物に。氷川神社。日本武尊東
征之時。勸請素盞嗚尊也と云り。素盞嗚尊を
勸請と云て。然ば説あまぜ。日本武尊東征之時と云るを
信ずとし。まと後の撰国風土記に。孝昭天皇三年所祭素

盞嗚尊、大己貴命、奇稲田比咩、合三座也と云る也、殊に信
ら れ 延喜式の御撰有し比まで也、一座あり し故に神
名帳に其座数を記され然るに今は三座なるし 拠に国
風土記を記せる程なれ事なれ ば二座は元と
已式外なること云も更なり已然り て也稲田比咩命も聞
もれど大己貴命も漫説なり 当社男躰宮の大祝岩井氏
ふ傳も亦古文章に ハ男躰宮素盞嗚尊女躰宮稲田姫命
火王子宮と称るを扶桑見聞私記と云物に建久八年
四月に将軍当社に参詣あり し事を記して神れ由緒を
尋られし に神主申云大己貴命 出雲大社を勧請し
奉る故に大宮と号 此神むかし出雲国氷川上に居
給へる故に氷川明神と申奉る と云る由見えと已に
安言多比書に一向に信げ けき 若宗あらむ
大己貴命と云るは其神主の故実に闇きあり を然ば
き式に一座あれ ば男躰宮おそ本社おき ば今云宗て も有べ れど
子宮は宗は式外の末社 女躰宮火王
因に いち〻驚しく外れ り 又按ふに火王子と云神も
富士の末社 も有て詳 ら ば聞もれど も此も斐伊社
佐王子と云意に ふて 即須 ○川上も師云。加波乃弁と訓
之男命も御子 れらむ へ 法き所も有ぞ。

此も加波加美と訓法し。其故も同風土記に出雲大川源
自伯耆與出雲二国堺島上山流出仁多郡横田村即経横
田三處三澤布勢等四郷出大原郡堺引沼村即経來次斐
伊屋代神原等四郷出出雲郡堺多義村経河内出雲二郷
北流更折西流即経伊努杵築二郷入神門水海此則所謂
斐伊河下也云〻自河口至河上横田村之間五郡百姓便
河而居出雲神門飯石仁多大原郡○此大河の下古も神
門水海に流入しを寛永のころ大水出る時に
已流変りて今は伊努郷より東方に流て国中に入海に
入とおもはれ此入海も国中を東より西に遠く入る
海に昔は淳海おりしを肥大河の流入る故に
その河水に衝れて今は淳入ら ず淡海おりとぞ。まと仁
多郡室原川源出郡家東南卅五里島上山北流所謂斐伊

大河上也。まゝと同郡横田川源出郡家東南卅六里室原山北流此則斐伊大河上ゐど有を見まゞ島上は。此源ゐまはゐ。万葉五卷ゐ。許能可波加美爾。まゝと十四卷ゐ可波加美能ゐどあ。此て川上てふ言の證ゐり。○在は那流と訓べし。字も辭も万葉ゐまゞゐ例多し。ホ阿流の切。○島上之地て。とる辞ゐり。師云。まゝと彼風土記ゐ。仁多郡島上山郡家東南三十五里。伯耆與出雲之堺と見え。右ゐ引る處ゐも見とゐが如し。此山今俗ゐて船通山と云ふ此山の東ゐ室原山あり。其間を越れバ伯耆国日野郡ゐ至るとぞ。○箸和名抄ゐ唐韻云筯匙也。字亦作箸和名波之をあり。箸てふ言て橋端まゝ柱の波之とも同言ゐり。其て出てゐ。第五段ゐ注ゐるを見るべし。○從其河て師云今語ゐらば。從其河上と云ばきを如此云ゐて。古語のちまゐ。從て袁の意ぞ。姓氏録佐伯直條ゐ。青菜葉自岡邊川流下天皇詔應川上有人也云〻。繼體天皇卷歌ゐ。皺都細能哿婆庚那峨例俱屢ゐどゐる。皆同じ言ゐ。まゝ万葉ゐ。霍公鳥ゐどの哥ゐ。從此鳴度を多く詠るも。此をりと云意ゐて非ず。此を鳴度ると云意ゐり。古今集春下。清原深養父哥ゐ詞書ゐ。山川をり花の流まゐを詠る。まゝ源氏須磨卷ゐ。沖をり舟どもゐ歌ひめ〻ゐりて漕行ゐど云〻。これらもみゐ同じゐとゐ。○以爲人有而は。人有祁理登以爲而と訓ばし。祁理て推度て定むる意の処ゐ用るゐと多し。○覓上往者は。麻岐上理伊傳坐志加婆と訓ばし。○有啼哭聲矣て禰那久聲伎許延伎と訓ばし。有を字のまゝ訓むて漢語ぞ。禰那久は音泣ゐ。應神天

皇巻ふ海人乎因已物而泣也おぎてのア。此わが方葉よ。哭泣雀鴨泣耳師所哭者泣友おど。いと多く見也。○老夫た意伎那と訓法し。和名抄ふ翁、孫愼切韻云。老人也。和名於岐奈ぎあア。まと古老於岐奈比止者宿布流於木奈とも見也。日本紀ふ。老公。老夫長老おぎ。これ於伎那と訓ア。ちて於伎那といふ言義は。於伎た息那た長ふて。命長き人を云ふ稱ある事。既ふ第十段の傳。注るゞ如し。○老女は。師云。意美那と訓法し。新撰字鏡ふ娘於彌奈とてのア。娘た字書よ見えゞ。字の躰を思ふ。老女の意れ和字ある法し。續紀十三ふ紀朝臣意美那と云ふ婦人れ名も見也。抑老女を意美那と云は。少きを袁美那と云ぎ對ひて大ぎ小ぎ戔以て。老ぎ少とを別て法稱ある。ア。まと伊邪那岐伊邪那美おどの御名れ例を思ふよ。意伎那。意美那た伎と美と戔以て。男女を別てる称ある。べし。ちて和名抄よ。說文云。嫗。老女之稱也。和名於無奈と見え。日本紀ふ。老婆老嫗。老女。かの續紀十三ふ。朝臣意美那をも。同紀五ふた。音那とてのア。まと家原音那と云も。同巻よ見也。土佐日記よ。たきおむおと云るも。老夫老女の意ぎり。然るを注ふ翁ある女と云法れ誤ぎり。法と万葉ふ。嫗。靈異記よ。嫗。於于那おぎ見えと法た。中古をゆたて。美を音便ふ牟とも宇とも云れせる物ぎあア。是まと袁美那ぎも。後よた袁牟那ぎ母。袁宇那とも云と同例ぎあア。意と袁とを以て。老少を別おことは。祖父母を意知意婆ぎ云ひ。親の兄弟を袁知袁婆ぎ云類ぎり。然るふ後世。意袁の仮字乱きてをり。是ら安ばて分れゞぎゆよと。又師た。万葉よ執あアとて。老女た於與那と訓法し。和名抄れ於無奈も。無た與の誤ぎらむぎ云ぎれど心得安。凡て於与那と云ぎと。物よ見えとる事ぎし。○童女は。

師云袁登賣と訓ばし。袁登賣のおと上ふ見も。おゝよ童女と書る
て。いまゞ成長らぬおと聞もまぜ。下よ御合ませ
る事あれど。おゝもむげよいときおれふハ非じ。書紀ふ。
少女。幼女。幼婦。万葉六ふ。漁童女おど見え。和名抄よ。小女。
和名乎止米。童女同上とも有きど。童おゝ流字も袁登賣を
云おゝ。まと和名抄よ。童女。女乃和良倍。書紀五ふ。童女と
もあれど。ちて訓べのらば。まと和名抄よ。信濃国
の郷名よ。童女を書て。まゝと宇那章とも訓ばし。万葉十六
乎無奈と云るもゝ有り。
ふ。童女波奈理。和名抄人倫部老幼類。ふ。髫髮和名宇奈爲ふ
ど有きど。髮を以て称ぶこと。總角目刺ふどの如し。今世よも。童男を前髮と称ふ。
置而は。中爾須恵氏と訓べし。万葉十一よ。人祖れ未通女兒居て守ふ山辺ゝら。と有。
○撫之泣也て。加伎那傳氏泣那理と訓むばし。古事記ゝ

は。あゝ泣とゝ流を記傳ふ。泣那理と訓て言れしは。此那
理て。古文の辭ばのひ字能知らむ人。わきまゑてむ。下の
喫を久布那流を訓るも同じ。凡てかゝる那理那流て。見聞物のう字を。他々り言と
ゝ添る辞あり。おゝて老夫老女のうへ字。須佐之男命
の見とゝ乃ふ方を。ゝ高下の喫て。遠呂智ゞう字。老夫れ
見る方をり言ふり。此辞中古の物語文おどよも常
多ゝれど。おわざゝよ見る故よ。心字おくる人れし。○誰
耶て。多禮曾を訓ばし。師云。是を多曾と訓むてわろし。已を於乃。我を和。汝を那を云例よ。多
礼を多と云むて。れわ然ゝ事おれ
ど。曾は必濁べきを。清て心得ば。
し。凡て自称とゝの吾字。我字。僕字おどを。夜都加礼と訓
は。人世をおりて。ゝ文よ。ゝたちも有ゝれまど。神世よて
さる言おし。多ゞ阿礼。於能礼と云しおり。夜都加礼
と云語の意て。清寧天皇。巻ふ出さり。其処よ云へし。○国
神。おは大山津見神よ係。ゝて聞もまぜも。書紀ふ。吾是国

神號脚摩乳と見えぱと吾国神名猿田毘古大神也まと吾国神名井氷鹿おどのある例ふ依れば自稱るおア。さまば此よて姑く読絶べし。ちて国神也た師云高天原ふ坐神を天神と申ばふ對ア。此国おる神を云おア。神祇令義解ふ別とる。天神地祇た疑ひあり。但し何事も此国ふて言ふとれば故ふ天神とは申せぞも国神とは徒ふは言ば。巻首ふ五柱天神をば別天神とあまども其次ふ此国ふ成坐る七代神をば多く神世七代と云て国神世とい云ぞ是その意ぞ。国神とた多く天神ふ對ふと妃れみ云稱おア。此も天ヒア降來坐る神ふ對ひて申言おり。右ふ引る猿田毘古大神も然ア。まと迩く藝命の詔ふ必国神之子と云るも天神の御子おら志の意おきば れり。○大山津見神た上ふ出とア。第十六段見るべし。○足名椎手名椎は師云奇稻田比賣を撫愛しみおる由た名ふて足撫豆知手撫豆知の約ア多ふおア。傳豆を切むれば豆おア。ちまば是た比賣た須佐之男命た御妃ふ爲給ひて後ふ御親を思ひて稱しものぞ。然らざれば子を愛みおる由多本む今此ふ吾名とて名告おるた前後違るふ似とれど凡て後を以多始ア也同らし言ハ古傳の常おまば妨おし。石根拆ちて足と手也を分て父母ふ當多ふは意おし。と云こと分て負とるのみ れり但し足以て父ふ負とるハ古は手足也は云た足手とぞ云れむ今も足手纏おどた足を先ふ云ぬり。椎た借字ふて野椎おどの如く某豆知と云例ふのまと有て上第十三段野椎神の下見べし。ふ云ふ如く豆は之ふ通ふ辭知た稱名れア。書紀ふ摩乳と書る文字ふ泥

みて。知を乳養の意とするに。例多も考ふべ。古言躰をも知らぬ辟説なり。乳養を乳とのみ云て。聞えむ物ゝなし。まと父ゝ。乳養を以て名くむ物ゝなし。○妻名。女名。上ゝ此老女は妻なり。童女は女ゝと申せ。言無れど自ゝら妻子と知ゝ。故ゝ。直ゝ如此なる申せる。○眞髪觸奇稲田比賣。古事記ゝ。櫛名田比賣とあるを。今なる書紀一書ゝ拠れり。眞髪觸なる奇と云む發語ゝ。眞なる髪を稱とる言。櫛は髪ゝ觸る物ゝ。如此冠らし。彼薦枕高皇産靈神。天疎向津比賣命ゝの如く。神名ゝも發語をなくは。上代の文なる狀。師云。奇は美稱ゝ。例なる櫛八玉神。櫛石窓神。櫛御方命ゝ。猶多ゝ。稲田は。師說なる如く地名。其由なる下ゝ云ふ。故徒ゝ稲田比賣とも有。然

ゝを久志をゆ連く故ゝ。志ゝ伊の響有て。おなる故ゝの那陀を云ゝ。ゝまば。名田とも有。猶下第七十一段の傳ゝ注ふを見ゝべし。まと按ふゝ。櫛戴ゝ。其なる能登國能登郡ゝ。久志伊奈太伎比咩神社ゝ。考合ゝ。べし。○自本師云。おなる常ゝ固を云とな聊異ゝして。俗言ゝ。元來と云意ゝ。○八稚女なる師云。夜袁登賣と訓べし。書紀ゝ往時吾兒有八箇少女と書ゝ。八なる例の多く多紀を云ゝ。ゝまを多ぎも。八なる例の多く多紀を云ゝ。ゝまを多ぎも。幾人も有し意ゝ。ゝるべし。白椅原宮段ゝ。七嬢女。日代宮段ゝ。二嬢女ゝ。おどもなる。○在字なる有。字なるべきを。此方なる古書ゝ。通用ひ多ゝ。○高志は地名ゝ。和名抄ゝ。出雲國神門郡古志とるゝ。是ゝ。名義なる風土記ゝ。古志鄉。卽屬郡家。伊弉那彌命之時以日淵河築

造池之爾時古志国人等到來而爲堤即宿居之處也故云古志也まと同郡狹結驛古志国佐與布云人來居之故云最邑其所以來居者說如古志鄉也とてのり。内山眞龍云。日淵河の水を引て池を造り時は越国人佐与布等來りて堤を築き即宿れりし処おきバ越国の名を取て神門郡は古志鄉あり。また其人の名を取て狹結駅と号ひ遥き越国を來宿れる故に意宇郡母理鄉の傳は大穴持命越の八国を平て還坐れと記し古事記は八千矛神高志国に沼河比賣を婚給へることあり彼神此平給ひし国おきぢ越人の出雲子上を依由に明おり。越後国は古志郡あり。頸城郡は沼川鄉奴奈川神社もてり出雲風土記抄は古志郡家者從今弘法寺六町西北田畴俗呼言鄉所蓋是也。并古志芦波知井宮等以為一鄉又云日淵河者蓋芦波与知井宮之境俗呼云保知石川と云ひ古志鄉以保知石大明神為氏神此社者在佐知石谷寛永年中迁祀古志村中。栗皮塚田滝之圏山是則伊佐那美命也とも云へり古志郡家に通度ゲ文は依るは神門川の東は有り今の河流も変さるものろ。

○八俣遠呂智。師云。八俣之とを添て訓ひろし。上れ八尋殿十拳劔八咫鏡あるどれ処くふ云るの如し。八俣に。次ふ身一有八頭八尾と云る是おひ。去れたち書紀は頭尾各有八岐とあひ遠呂智は。書紀ふ大蛇を書ひ。和名抄ふ。蛇和名倍美。一云。久知奈波。日本紀私記云。乎呂知とてのり。師云。今俗りて小く尋常おるを久知奈波と云ひ大おるを幣毘と云ひ。おれ大れ依を宇波婆美をいひ。極光て大れるを蛇を云れひ。遠呂智とて俗ふ蛇と云ばのりおるをぞ云れむ。名義青呂智てふ言の阿の省かひ。師て尾於杼呂智は。て尾のれをろ辣驚くおぞく同言おり。ちて其於て遠れ韻は。あ依故りて省ひ。まと遠杼て切れむ依り抑これ蛇て上おき霊剣を尾中ふしも含持きば其威霊ふて餘所をひも尾て殊はいりめ去く。おぞて名ふ負せしおらむと説きおる。理て然もと聞ひまど。猶然は。て所らじ。青呂智とて。俗ふ青

野呂智を云蛇にて。此を青呂智といふ国〻多られぬ。其れ尋常は倍毘と云ばかり。越後国などの人〻まさ相摸国大山辺の人なども然称ふを聞さめ猶ほ〻云国〻多るべし。出羽国は秋田庄内辺にて青蛇ろちと云ふ。江戸などにて抑蛇の類は多く体中に此蛇もしも常青大将をいふ。

草村の中に在るも。餘は蛇等をめは。平穏に長くして。人に害を爲さをぬ。餘は蛇等は如く酷しのらば。青大将と云て。かく穏に老成げに成る故に云へる外らむ。然きども体さ此蛇ぞ〻は。大なる蛇なく。俗に宇波婆美を云ひ。大蛇と云外ぞの有状を探体に。皆おは蛇の大に成れるにて。其餘は蛇は状なるを聞くばかく大に体性の物なる氣おや。自から小蛇の時にて。然しも害を爲さを。老成く体事と思めるなり。俗に宇波婆美と云を常陸下総などの人は。衰加婆美と云ひ。出羽の秋田などにては。宇加婆美といふ。其は於加美と同じくるばき去を。第十六段に云りき。此衰呂智は。のおらば彼高靈神の御末なりと思ふ由あり。下に注ふを見し。然れば衰呂は。青に呂てふ辭は添りさ体ば。阿の省は多る語。智は師説は如く。例の稱名なり。下に須佐之男命は御言に。汝者可畏神也と詔ひ。まさ欽明天皇卷に。狼を也貴神と云ひ。虎をも威神を云へる言なる如く。かく体物をも稱にて。智とは云へる外り。蛟などの智も同じ体して此は。靈神は末ならむとさ思めるなり。○來喫雄は。伎氏久布那流と訓ぶし。師云。出雲風土記に。神門郡に來食池と云なり。去は何れ由にて名けしにく知ら祢ど。言の

同きはゝ引出ゐ。○今云こゝ高志郷と同じ神門郡ゐれゞ遠呂智の來て喫れる由の名あらむも知べからゞ。周一里一百四十歩と云ふは池ゐゆ。内山眞龍ゝ來食ゝ久久比と訓ばし鵠ゐり。垂仁紀ゐ誉津別皇子見鵠得言云云。鳥取連祖天湯河板挙遠望鵠飛之方追尋詣出雲而捕獲云云。此事ゝ所由ある池ゐるべしと云ふ。○今其師云。其とは。上の遠呂智を指て云ふ古言ゐ。漢文ゐ云其と云ふ。書紀ゐ格異

○赤加賀智。古事記本注ゐ。今酸醤也ゝ云ひり。赤酸醤と書て此云阿箇加知と云ひり。和名抄ゐ。兼名苑云。酸醤。一名洛神珠和名保ゝ都岐ゝあ。師説ゐ。名意は。赤赫都宋ゐて。都美を切て智と云ふ。字鏡ゐ。酸醤加我彌吾又奴加豆支と云ひり。加我彌ゝ赫宋ゐり。和名抄ゐ。蟒蛇夜万加知と云物也云ひり。ゝ言れゝと。然ゝゞ今ゝ現ゐ山加賀智ゝも。赤加賀智とも云て。赤黄斑ゐるゞ腹ゝ殊ゐ赤く。目は皿を沃ゐ如く赤ゝ蛇有。赤赫智の義ゐるばゝさて此ゝ凡て青呂智とゝ異ゆて。かゝしおく強気き物ゐるゞ。又いと大ゐるも有ゝ云へ。此ゐ依て按ゐ。古事記の本文ゝ意は。青呂智ゝ目は。赤加賀智といゝ蛇ゝ如く。皿走ゝゐと云意の古傳ゐ。れむを名ゝ同じゝ故ゐ。酸漿ゝ事ゝ心得て。今酸醤也ゝ云註ゐ加ゐるゐゝ非じ。斯ゝかり大ゐる蛇の目ゝ赤く恐し。ゝを譬へ言むゐ。酸漿は似ゝ有ぬをも思ふばし。越後国蒲原郡小関村ゐる教子上椙篤興ゞ語ゝゝはゝ。己ゞ弱きと。村の近き辺ゐる大木の朽と空ゐ年久しく腕の太さゝりゐ赤加く知住て時く頭を出ゝゐとゐ有しゐ。童子どもの打ゝゝゆて其空ゐ。ゝきゆゐ木竹を刺入れるゐ。其蛇遂ゐ死てけり。斯て其を引出して切散しれゐ。尾ゐ。ありし骨

の三四寸許りあるを、鋏をもて切れど削ぶれよ、いと能く切らまし。濡れる紙さへ見れ侯よ。江戸人の來相て、そを買取りて去れる事あり。後ふ此古学ふ入ゐて、遠呂知の尾より雲剱の有し事ふ思ふ。我ら買取ざりし事ゆ口惜しと云り。由有げ外るこゝをあり。○さて序ふ云む、酸漿の実を保ゝ都岐と云て、頬突外ゐ、奴加豆支て額突おり、彼実れ枝ふ付さる状、田くて、人ゆ頬を抓き、額を突さる如く見成さ侯れむ、云るおらむ。○八頭八尾は。師云。加茂翁の。加志良夜都。袁夜都を訓れ抓るぞ。皇国の物言外侯。○蘿て許祁ふゐ。万葉ふ多く此字を書ゐ。和名抄ふ。切韻云。苔水衣也。亦作苔。和名古介と云ゐ。蘿て別ふ出して。唐韻云。蘿女蘿也。雜要訣云。松蘿一名女蘿。和名方都乃古介とも有れど。此の蘿て多く許祁ふ用ひとゐ。谷川氏云。許祁て本毛おり。○檜杉ゆ事は

既ふ註へゐ。此を書紀ふて。松栢生於背上と云ゐ。和名抄ふ。松漢語抄云。字亦作榕。和名萬都。栢兼名苑云。一名栩。和名加閉と云ゐ。○長は。師云。那賀佐と訓ぶし。大さ廣さ深さおぼぎ云格の辞て。奈良まぐふて正しくて見當ら祢ど。必言でい得あらぬ辞おれば。如此訓抓。此ふ多祁と訓るて。ゆは。多氣て高りて。人まさ本草おど。立る物ふ云ことれり。蛇おどは横ふ長き物ふおそ有れ。高く立物ふは有ら祢ず。多氣と云べき由おし。○谿て和名抄ふ。爾雅注云。水出山入川曰谿。又作溪。和名多爾。水與谿相屬曰谷。猶谿也と云ゐ。○峽て。師云。袁と訓ぶきおを。谿八谷の例ふて明し。尾ふ此字を書る例て。懿德天皇紀ふ。曲峽宮。神功皇后紀ふ。活田長峽国おど云ゐ。峽て和名抄ふ。峽山間峽処也。俗云山乃加比と云る如くおまず。尾ふて非ず。但し荊州記ふ。三峽七百里中。兩岸連山無断処おど云る。彼山の長く連れるさはを取

て、尾は用ひさるなり。書紀ふた。蔓延於八丘八谷之間と書れたり。此餘も、尾ふた畝丘、蟻丘などの字をかれり。此書紀ハ多く丘字を段ふ委く云ばし。雄略天皇巻見るべし。○悉常は。許登碁登爾伊都母と訓ばし。○皿爛也た。知阿延多陀禮多理と訓ばし。ちて此大蛇の形を書紀一書ふ。大蛇毎頭各有石松、兩脇有山甚可畏矣と云り。幾千歳を経てかく大に成りて、八丘八谷に蔓るばかりの遠呂智ふき、ゐとれく蘿生ひ土おきて、身に山を成し、松柏檜杉さゑに生さまで、信に山の動き出さは如くふぞ有々む。今も大亀の背ふどるは、自然ふ蘿生ひ、土おき、種くの物生て、多く背より見てた、其物とも覚ざる状り見ゆるも多くるれどを思ひ合せばし。○是汝之女則た。許禮汝之女那良婆と訓ばし。是とた。童女を直ふ指て詔ふ御言ふり。○立奉哉は。本ふた、立字ふり。下文ふ依て加ふさり。多氏麻都良年夜と訓ばし。師云。此の奉を旧く久礼年夜と訓り。書紀も同じ。其た吾ふ奉ると云むた、いかゞと思ふる故の訓ふまども、上代ふは貴人た自れう ふを、寄みて詔ふこを常ふり。後世の心を以て疑ふばきふ非ず。久流と云言も、土佐日記、うおお物語ふどふも見えて、やゝ古けれぞれ。然た訓ばきふ。○雖恐た加志許氣禮杼ども。本ふハ恐ふと有るを、師の訓ふをりて、如此書おり。師云。速ふ諾べきふれども。ぞ云意れ言ふり。かゝ処ふ、恐と云言の意た。次ふ云を合せ考ふべし。○不覺御名は。師云。御名袁志良受と訓ばし。是はいろふる御方ふ安知らぬと云意ふ依ばし。まと上古りた女を嫁べるふらひりぞも思ふど、御答、お御名告れりまで、上の意ふるべし。○伊呂勢。末りた伊呂兄ぞ書とり。師云。同母兄を云ふり。伊呂ぞた。本愛しみ親み

て云言あり。此事浮穴宮段。常根津日子伊呂泥命の下より委く云ばし考ずてよ。加茂翁説に伊呂は家等よりて万葉十四東哥に伊波呂と云る是れり。けて同母の子は母と共に同家に在る故に伊呂母伊呂兄伊呂弟伊呂姉を云あり。伊呂は思ひ先ふ思られる物と。ひしりぞ非ざめれ。是ぞ古の趣をよく得

外に故に。兄と詔ふあり。其由は上に云り。第十一段我那勢命となる下見合ばし。上に天照大御神の大御言にも。我那勢命をなのり。第三十二段見るべし。○恐は。師云訶志許斯と訓ばし。下に。天尾羽張神の答に。恐之仕奉と見えぬと言代主神の語にも。恐之此国者。立奉天神之御子と見えまた穴穂宮段に。恐隨大命奉進ぞなると同じ語格あり。速に諾して承る詞あり。今世言に。承諾はるを加志許麻理申多と云ひ。畏候あど書も此より出さば言に全同事あり。また此は仁徳天皇紀播磨速待が哥に伽之古倶等望。阿例椰始儺破務と云るに。をく似さる趣なれば。加志許久斗毛と訓べきか。ぞも思ず。そは賤き女を奉むは。恐くともれり。然きども猶前の方ふるばし。○隨勅は。書紀に據て補ず。美許登能麻く邇くと訓べし。立奉於吾哉と詔へる御言を指て云り。○立奉は。師云多氏麻都良年を訓ばし。如此書例は。右に引る言代主神の言。また木花之佐久夜毘賣段にもなり。立字を添さる故は。多都とばかりも物を獻るおと。麻都流とばかりも獻るおとをふて。多氏麻都流と云は。本其二を重ねる言あり。はと獻ばを麻陀須を云ばこをなり。其を多氏麻陀須とも云ば。その多氏も

同じ。今云多氐麻陀須てふ言の師説も、第百四十六段の傳ふ注せり。考へ合はべし。けて奉字は。多氐麻都流とも訓ども。はと常ふ麻都流とばこのアふも用ふる故ふ。かく立字を添ても書るあアも。獻はを。立とだうアも云はも。大神宮儀式六月十七日夜。御食直會哥。ふ。佐古久志侶伊須ぐ乃宮仁御食立止云く。御食奉るとてあアも。是れアも。まと万葉一ふ。山神乃奉御調等六ふ。宮柱太敷奉、あぞ石る。此二の訓も誤りとも見れど。奉を多都ともいふ言の有しから。古くをりかく訓るあをぞ。あれらも一の證とも出ぢくあむ。

爾速須佐之男命。以其童女。取成湯津爪櫛而。刺御美豆良而。告其足名椎手名椎神曰。汝等。以衆菓。釀八鹽折之毒酒。且作廻垣。於其垣作八門。毎門結八佐受伎。毎其佐受伎。各置一口

酒槽而毎船盛其八鹽折酒而。

可待吾爲汝當殺其遠呂智也

教出矣。

湯津爪櫛の事は上に既に注ずるが如し。第十八段の傳見ぱし。○取成は師云下に令取其御手即取成立氷亦取成劔刃とある と同くて此物を變化て彼物に爲ずと書紀に立化奇稻田姫爲湯津爪櫛而挿於御髻と書きある化字によて明し。

古來この立化二字を、タチナガラと訓るは當らぬ。立一字をさも訓べしさて化字と下に為字とを合せて、とぷかしと云ふ言ふ當れり。然るは是は比賣の身體を櫛に變化て須佐之男命は已命の御美豆良に刺給ふぷ。然るに中古は異說ありて、稲田姫の處女なるよそひを化て、櫛を其髻にさして、須佐之男命は御妻に化て、櫛を為ぷて、御髻に稲田姫の形に化りと云ひ、或は須佐之男命さし給ふ所以はいろ〳〵なる事ゝ知がなし。清輔奥儀抄に、櫛に給ふりと云ひ、或は須佐之男命さし給ふ所以はいろ〳〵なる事ゝ知がなし。清輔奥儀抄に、櫛に取成て蛇に見せじを爲給ふ故ふや爪櫛に成て惡鬼のおそるる物にて侍るなこそ。同紀にも醜女に追れて逃るに、ぢをくて懷を爪櫛をとぷ出て打はく。其時醜女追さして返ぷぬ。と云ふ事ゝのめを云ぷ。但しおちて追さしとめとは見えぬ。

如此る由よもや有む。○御美豆良を上より出ぬ。第十八段の傳見るし。○衆菓は。毋く呂く能許能美と訓べし。和名抄ふ。漢書注云。木實曰菓。日本紀私記云。古乃美。俗云。久太毛乃。草實曰蓏。和名久佐久太毛乃。をの巳。○八鹽折を。師云書紀ふ。八醞酒と書巳。醞釀酒也とも。久釀也とも。字書よ注せ巳。はと和名抄ふ。說文云。酎。三重釀酒也。漢語抄云。豆久利。加倍世流佐介。西京雜記云。正旦作酒。八月成。名曰酎酒。一名九醞。通俗文云。醞。酸酒。切韻云。酸。酒再下麴也。俗語云。曾比。をの巳。今云。此を師の引れあるをりを。少し委く引と巳。さるを再麴を下ぎを酸と云ひ。其を曾比と云ゞ。此ふ用有れバふ巳。此を夜志本袁理を云ふ所由を。私記よ。或說。一度釀熟絞取其汁。兼其糟更用其酒爲汁。亦更釀之。如此。八度是爲純酷之酒也。謂之鹽者。以其汁八度絞返故也。今世亦謂一度便爲一鹽也。謂之折者。以其八度折返故也。是古老之說也と云巳。此說大かと宜のるぢし。八度折返とは。古何事ふはき。同復て物ぎはを。折と云るふや。物語文ふ。折返し歌ふぞあり。あは折から。折節。其折。彼折ふど云。折と本同じ。まとを巳〳〵れとゆも同言ふり。一度二度を。一ゝをりを。二ゝをりと云を。此の折と全く同じ。はと酒折池。酒折宮ゆど云も。をの巳。はを思ふば。折を酒を造るふ。殊よ云言ふるぢし。酒折池を。崇神天皇。卷ふ見え。酒折宮を。景行天皇。卷よ見えと巳。ちて新撰字鏡ふ。酸。志保留と。をの巳。酸を醞。俗字と見ゆ。ちて釀は。說文ゞ厚酒也を注せゆ。此ふ依らば。厚酒を造るを志保留とは云はよや。志保留を。卽志本袁留の切ま巳ゑ

る言ふて。幾度も折返し醸意ふかばし。さて物を絞ると云も此を卍出と
ふかまと物色を染るを一しほ二しほと云も本同言よて其れ理を暑れる言おらむ。けて志本を
は。酒を造るよも其汁を云名ふや有ら年。淳もかの伊邪那岐大神れ段
色を染ふかふ也。
ふ塩許袁呂許袁呂迩画成てふ古言よとまむ凝堅まるべき汁の意おり。さて食塩れ淳をり出る名おア。ま
ゑ八鹽折之紐小刀と云もの卍。其れ玉垣宮段ふ云ふばし。○毒酒れ阿斯伎佐祁を訓ばし。舊訓よも
おろの。諸の菓を以て。八鹽折ふ醸る酒を。れ毒く醉ふばく造卍給ひれむ。○醸は師説よ。酒を造るを云。古歌よ古まりを見も。字
鏡よ。醸造酒也佐介加无を注せ卍。此加牟を口よて咬咀て作る故おりと云れ
臆度のひが言おり。加牟れ和名抄よ。麹を加無太知を有ふかは。かび爲ちよて。俗ふ花の付と云おれおア。されば酒

も。かびだ〳〵せて作る意よて。加牟と云ふおり。故加毛須とも云ア。を有卍。是ぞ正説おふ。然るふ。日本決釋をいふ物よ。應神天皇之代。百濟人須曾己利。人名酒工。參來始習造酒之事。以往之世。未知醸酒之道。但殊有造酒之法。口中噛米吐納木櫃。經日酣酸。名之爲醸。故今世謂醸酒爲嚼。是其法也。今南島人所為如此。とあるは。舊き妄説と聞えと卍。此書れ古事記裡書といふ物ふ引とり。日本決釈日記をもあア。應永三十一年七月五日。書写の奥書ある書よ引とれむ。中〻ふ舊き物ふてれ有おり。おれ酒を造始ゑふかは事。はと酒よ要ふる事どもは。少毘古那神の處ふ委く註ふばし。第九十三段の傳見ばし。○垣れ師云。限おア。○作廻れ師云。縣居翁の。作毋登本志と訓れゑふかふ從ふばし。毋登本志れ毋

登本良志米ゐ卍。母登本留て卽廻はゐとゐ卍。万葉十九ゐ。大殿れ此廻の雪ゐ踏そ祢。まと大殿乃此母等保里れゐどゐの卍。ゐゐ此言。白樗原宮段れ哥ゐ出ぬ。とゐの卍。儲ゐの垣て何處ゐ作れを宣ふ事ぞと按ふるゐ。足名椎手名椎神れ住居れ周ゐ。ゐ作きとの事ゐるぱし。然るて大蛇の來るはかゐらば彼神の住屋ゐはべれれば外り。

○作八門。此て垣れ四方ゐて有ぱゐら岌。決免て一方ゐ竝ぱて作らし免給ひれむ。其は頭こそ八ゐれ。身は一ゐきだ。一方ゐ向ひ來る理卍ゐきだゐ卍。○毎門結八佐受伎とは。師云門毎ゐ一ぬゐ〳〵ゐて。八門れれだ。合せて八結を云ふ。一門毎ゐ八ぬゐ〳〵。合せて六十四ゐて非ば。古文ゐは此言てゐれこのゐ通せと依語多し。能せばれて謬れゐむ。大祓詞ゐ天津金木を本打切末打断て千座置座ゐ云〳〵と云るも打断ての下ゐ置座ゐ作りと云言を省きて。然聞せと依ゐ同じ。此も毎門結佐受伎八門合せて八佐受伎を云てハ言重ゐ依故ゐ省きゐ。然聞せゐるものぞ。ちて八稚女八俣八頭八尾八谷八尾八鹽折八門いぬれも慥ゐ七八の八ゐて非で。本て多〳〵多紀を云る語ゐ卍。然るを神道ゐて八數字ゐ尊むゲ故ゐり。外ど云ふ說て論ふゐ足らば。○佐受伎て師云書紀ゐ作假庪八間を書て。假庪此云佐受枳とゐの卍。庪て閣也と字書ゐ見えはと所以藏食物とも見も。和名抄ゐ類聚圀史云假床此間云佐受枳。今案假搆屋內床之名也とゐの卍。此等は字ゐ就て云ゐ依れみゐ卍。佐受伎て。後世ゐ物見る料ゐ搆ふ依。佐

自伎と云ふ物即おきをあり。さじ丸て即さびきの訛れり。書紀釈ふ今世桟敷欤と云り。桟敷の字て。おしなべてよ作きる物あるを。此字よ依て。さむじきと唱ふるて。甚く非あり。さじきてふ名て。物語文ふ多く見也。神功皇后紀ふ。祈狩の處ふ。二王各居假庇赤猪忽出之登假庇まと雄畧天皇紀了張夫婦四支於木置假庇以火焼殺おぎも見えと。○一口酒槽。酒槽て佐加夫禰と訓ばし。書紀の古本よ和名抄ふ文選注云。槽今之酒槽也。和名佐加布祢。とあり。古事記ふ酒船と書とるて。語おう訓とり。一口は。比加布祢。とあり。比まく書るよて。事も別し。一口は。比登久智ぎも。比登都とも訓ばし。書紀古本よて。ヒトクチと訓み。今本よはヒトツと訓ふ。比登久智ぎ訓て解うば。今酒を作ある器を槽とて有れど。書紀一書ふ。釀酒八甕。とあるふ就て按ふよいみし。酒をばかれらば甕ふ釀ひて。其れぞらふ居備ふる例おまだ。此時も宋て甕よ造りて。むを。槽とあるは。槽よ釀るおと始ひて後ふ。何うまき酒を造る器をだ。布禰ぎ云ふ慣ひぎ形りて。此の甕をも槽と書れむ。今も酒を造る器をば。ばて。槽と。ぞ云ある。ちて一口れと云ふて。甕ぎいふ物の狀て。下ふ注ふ如く。口れ數あふも有しうば。此て八頭を。八甕よ一ッ形く垂入し。ぎむとの御計ある故ふ。口一ッある甕ふ盛置おぎ給ふ由ある。ばく。凡てかく。ふ物の數をいふ漢文ふ。一口二口と云。おれだ。此の一口も。その漢文れらむうと。比登都ぎ訓むうは。甕よて。あ思ふよ。あ然よは非じ。らで。信ふ槽ふて。一口は一箇を漢文ふ書ると見ふべし。

此二訓。今思ひ決めグ為し。○教之矣。衆菓をもて。八鹽折の毒酒を釀る事を。遠呂智を待べき構までを。教給ふ由

於是足名椎手名椎神。隨教言。設備而待出時。其八俣遠呂智。信如言來。爾速須佐出男命。勅遠呂智曰。汝者可畏神也。敢不饗乎。詔而。乃以八甕酒。每口沃入出。則其遠呂智。每船垂入頭而。飲其酒矣。於是飲醉而。臥伏寢矣。爾速須佐出男命。拔其御

佩出十拳劒而。切散其遠呂智。則。簸出川變血而流。其骸者。毎段悉化雷。飛躍而昇天矣。故切其中尾出時。御刀出刃少缺矣。爾思怪而。以御刀出鋒。刺割而見出則。別有都牟刈出大刀。故取此太刀而。思異物而。安置御許而齋出矣。天蓑雲劒是也。蓋其遠呂智出居所出上。常有雲氣。故名歟。故斷給遠呂智劒出

號謂大蛇止麁王。示云天羽羽斬止劒。示云天蠅斫止劒。示云大蛇韓鋤止劒。此劒者今在石上也。

隨教言設備而待之時隨教言ゝ。專足名椎手名椎神ふ係ア設備而待ゝ兼ゝ須佐之男命ふも係ア其故ゝ信如言とは須佐之男命ゝ御心ふゝ云ゝむ。○信如言來は嚮ふ老夫ゲ今其可來時と云し如く來ゝ由ゝ師云書紀ふゝ至期果有大蛇云ゝと云て此処ふて太蛇の形状を云れず此も蛇の形状乃言し如くふアと云ふ意もあもるばし。○勅遠呂智曰汝者可畏神也ゝ上ふ伊邪那岐命告桃曰汝如助吾云ゝとある類ふて切ふる事ふ當りてはふ何ふまれ物言かくゝふふと古も今も有ふ事ふアふ欽明天皇卷ふ秦大津父と云人の狼ふ汝者貴神云ゝと云ひ膳臣巴提便と云人ゝ虎ふ汝者威神云ゝと云ふふぞ我思ふばし。○敢ゝ伊加傳と訓ばし。阿倍氏ゝ訓む ゝ漢文読ふり。○饗ゝ既ふ上ふ註ア。第四十二段新嘗の下みるべし。○八甕酒前段の一口酒槽を比登久智能佐加夫禰ゝ訓て實ゝ甕を云ア物ゝとみむ乃は甕ゝ和名抄ふ示作瓮和名毛太非と見え新撰

字鏡ふ。甕瓮ともふ彌加と訓み。瓮字を書紀ふ。瓮此云倍
を有きを。毛太非。彌加。倍おを名を變れども同物ふ。今世
ふ大ふるをバ加米と云ひ。ふくて口のおを
みゑ佉坡壺と云ふ。然れど寀を同物ふり。然れど倍と
も彌加とも。毛太非をも訓ぢるをど。山城風土記ふ。釀八
腹酒をも有れば。此を本ふ。八甕酒を訓るを從ふぢし。此
を波良と云を。實の名ゑは非祢ども。口小さく中張ふて。
人此腹ふ似とをばふ。今時も土中を。上代の瓦器を
掘出るを。を〳〵有て。其形を圖集とるを見るを。一
口ふ佉も多ゑれど。眞中ふ大ふる口あ佉を。小壺此如く。
小孔ゑ口此十付ゑる。佉と同じ程孔る口の五付と佉も

有きいおきも底圓くて。直ふ居れど。傾き轉ぶ物ふる故
ふ。古書どもふ此器を置ことを。穿居とは云ふ。万葉の哥ふも。
伊波比倍を穿居ふど。屠を多く詠るを此由孔り。佉ゑ前
孔れふ齋瓮と云とをハ。黒田宮卷ゑ注ふを見を。
段の一口酒槽を。比登都能佐加夫禰と訓て。寀ふ槽を云
ふ。ふを見むふを。船ふ腹と云ふを。仲哀天皇卷ふ。船腹不
乾とふの佉船腹は。兩旁を。下。水ふ沒る處を云ふれど。甕
を借字ふて船を數ふるを。幾腹と云へ。と見佉べし。○
毎口沃入を。大蛇グ八ッ此口おをふ孔り。○毎船垂入頭而
云くは。八頭を各〳〵八腹の船ふ垂入て飲付し孔。垂入二字。
多礼氏と訓べし。總て蛇を甚く酒を好む物ふるを。況て
口おをふ沃入を給しゑば。かく飲付ゑ事を。寀然佉ふと

れ。○留伏寝矣は。已ゞ本れ住處ゑは歸らで。酒を飲とゐ處ゑ留めて醉伏し寝ゑとゐ由れ。○御佩之十拳劔の事は下ゑ注ぎし。○切散て。師云伎理波布理と訓べし。水垣宮段ゑ。斬波布理其軍士と有ゑ依まゆ。委くて彼処ゑ云ぎし。書紀ゑて。寸斬と云ゑり。○變皿て。師云。知邇那理氐と訓ぎし。仁德天皇紀六十七年。笠臣祖縣守ゞ。備中国川嶋川の派ゑ。大虬を斬まる處ゑ。河水變皿と見え。毎ゑ。変をカヘヌと訓るはかゑ色のうて。ゑとて舊事紀ゑ拠まゐ。○るを云ふ。○其骸者云く昇天矣。ゐと。徵ゑいゑりき。○紀ゑも。私記曰。師説此蛇斬爲八段。卽毎段成雷。總爲八雷。飛躍昇天是神異之甚也とゐて。傍の古書ゑ遺れる伊加を採まゐれらむ。

豆智とて。何ゑまれ嚴く剛き物を云ゑと。上ゑ注ゑて。

第十六段。第十八段の傳見べし。此の雷て。天ゑ昇れて。を有ゑ思ふ。決て龍ゑぞ有ゑむ。其は和名抄。龍。和名太都。文字集略云。能幽明大小登天。四足五采甚有神靈者也とゐて。此文ゑ。名ゐる事を書落せりと見も。其て下文ゑ。同じ文字集畧を引て。蛇龍之無角青色也。螭龍之無角赤色也。と有を見て。漢国ゑて直ゑ龍と云ふて。角あるを云こを知べし。然れど皇国ゑては。舊て。蛇の類ゑゐ。角はと四足の有無ゑ拘てらぞ。或て幽れ。或て明き。大蛇くも小ちくも變化て。雲を起し天ゑ昇て。雨まと冰を降し。れど去ゐ物を。今も多都と稱ふ。龍の天ゑ昇るを。蛇て。必鳴神あて。そて雷神の佐くゐ態ゑるを。人て然

ふ細し𪜈事までは知ざるふ故ふ。雷鳴𪜈やゞて。龍の態と思ふも有𪜈ア。但し斯ぞかア猛く靈ある物ふ𪜈有まゞ。此ゞ地ふ在と𪜈𪜈。大きくも小ちくも。蛇の形ある故ふ。倍美とも蛇をも云ふ。斯て此ある雷。やゞて龍𪜈らむと思ひ合さふ〳〵事は。靈異記ふ。雄畧天皇空ふ雷𪜈鳴るを。小子部栖輕ふ。請奉れと詔ふまば。栖輕馬ふ乘て空ふ向ひ。天皇𪜈勅あアを呼𪜈ア。て追ふふ。雷倦て落と𪜈を。捕ふて進れる事ありア。栖輕ゞ雷を捕ふる事𪜈。日本紀ふも見えあれど。靈異記の趣と𪜈異あアア。委くは雄畧天皇巻ふ注ふを見ム。其雷の形を。日本紀ふは大蛇と云ア。想合せて辨ふ𪜈し。然れど此𪜈傳ふ。雷化と云ア有𪜈。其昇る時ふ。いみじく鳴動きあどしけむ故ふそ有𪜈き。遠呂智ゞ甚く怒アて死ハむ。靈の碎ハて。かく數の龍と化て昇らむ𪜈。然も有べき事ふあそ。

○中尾と𪜈。師云八尾あまバ。端ある中𪜈𪜈有あア。鋏胤云。應泳州一年。沙弥道祥ゞ手写本と云ふ𪜈。切中尾時云〳〵と訓て有ア。とく聞えとア。○御刀は。即右𪜈十拳劔𪜈ア。○刃少缺矣は。尾中ふ劔あ𪜈故ふ。其ふ觸て刃の缺ある。あア。○都牟刈之大刀。師云刈を伎と訓るは由ふし。都牟賀理とは。物を利く截斷貌を云言ふて。今世語ふ。豆加理まと須加理あど云ふ即是あア。大神宮神寶ふ。須我流横刀と云ア𪜈を。式まと儀式帳あどふ見ム。須我利劔を也云ア𪜈ふと式ふ。出雲國出雲郡ふ。都我利神社と云あア。是等も同言ふ。今云。此社の祭神を。神名式考證ふ出雲臣譜ふ。伊佐我命𪜈子ふ。津狩命と

云あり。是あらむといふべし。ちて都流岐と云も。此都牟賀理也約ㄗ多名牟賀理也岐と約り。流也通ふ。おまきむ。都牟刈之大刀也。劔之大刀也云ふ同じ。冠辞考おるぎどちの條ふ。此事見とれども。其說紛しく。はゑ違ㄗる事あり。其也都牟刈草薙おど云ㄗ刈也。尖ㄗと依意と云れゲら。まと刈也葉刈草薙おど尖ㄗ。今思ふは尖ㄗ。物を刈断意おㄗ也云まと依意よれ而らじ。まと大葉刈草薙おども。刀の利きを云。依名おまども。大葉刈の刈也。木草の葉を刈断を云。依おれむ。都牟刈也刈と異れり。都牟賀理也。利く截断と貌ㄗ云言れきむ。刈は借字ふ。此ㄗきと能ㄗ。せば也混ひぬべし。○今云。師也如く云まゑる也然る言おまど。又ㄗく思ふふ。刈断意の加理と。都牟賀理の賀理也。語の用格ㄗ異おれども。加理也云也。何れも物を截断意おれむ。末は同じ語ふ落るおり。さて尖まふ意ふ非ざるは師說也如し。

大刀は。加茂翁の考ふ。斷也意よて名けゑㄗ也云まゑゑゲ如し。物を斷具れまむふ。今云下文ふ。斷給遠呂智劔とある処ふ注ふ說をも見ばし。ちて古書ふ也。多知也也都流岐とも。ゑゲ同物ㄗ通はし云ㄗ。都流岐也右ふ云へる如く。物を利く斷切ふ。依狀を云言おまむ。正くハ都流岐能多知と云を。暑きて。都流岐とのみも云あり。然れむ精しく分て云とㄗハ。多知也おべてㄗ名。都流岐也其用を称と依名ふ。はゑと字也。劔也也太刀とも。刀也也横刀とも。通也し書て差別ふし。然るを和名抄ふ。四邑字苑云。似劔而一刃曰刀。似刀兩刃曰劔。まと属鏤文選読豆流岐と云。るㄗ。漢国のさゑふ。此ふ依て。劔をばゃふらびゑ都流岐と訓み。多知ふ也。太刀と書ふと心得る也。後世のふ也ふり。さて師の。古也也皆諸刃ふ。片刃ㄗ刃ㄗ也。但し上代ふ也。小後ㄗ物ぞと云れしㄗ信ふ然こ也ふり。但し上代ふ也。小刀ふ片刃ふる也有ふ。王垣朝段ふ。紐小刀と石依也。必比毛賀多那と訓べきふ。書紀也書紀ㄗ也ヒ首也書て。然と免ㄗ。その加多那てふ名也。片刃ゃ。片薙ゃの義と聞也。然れむ上代ふも。小刀ㄗハ片刃ふる也有て。其字加多那とハ云しふ。和名抄ふも。太刀。和名太知。小刀。加太奈。まと刻鏤具ふも。刀子。賀太奈とあㄗ。然

ふを片刃おるが便をき故ふいれとおく。後よた。大刀を
も凡て。片刃ふ出ふ事よまれおきりれむ。天智天皇紀三年。
大氏之氏上賜大刀。小氏之氏上賜小刀。とゐり。此等の小
刀ハ。諸刃おりし。片刃おりしら知ずさし。はと武烈天
皇紀の哥ふ。飫哀陀擬とゐるハ。大
刀ハ中ゐて。大おるを云ふべし。○思異物而云〻。有はな
じ死物の尾よ。かゝ。ふ劔の有しらば。異物と思しれむた。
寔然おと外ア。鋏ふで作きる劔の。蛇ごの抑おを大蛇の尾
躰中よ有べき理おし。
ふ含み持とふ事ハ異死を思ふよ。彼袁呂智た。高靇神ハ
末おるばき事。既ふ云ゞ如くおふを。總て鐵は。人も知お
ぢく。蛇の身よ毒と爲おと。類外き物おふゞ。まと蛇ハ鐵
よ害ゐふ事も類おく。彼を切ある刀は荒外はアて。再用
ふふふ耐ず。其趣を思ふよ。鐵の性た悉蛇の體ふ混入る

故ふ。彼ゞ身を害ひ。刀は其性を失ひて。腐れおまふと見
えあア。信友説よ。西戎の漢高祖と云ふる王ゞ。白蛇を切と
切とる大刀を。やおとおあア。皇国よも蛇切丸おど云て。蛇を
害ふ蛇をさ牙。切とる刀れるふ。害れれず。と云義よて。珍
重みれるおらむ。然ふふ彼遠呂智の。然ばゝア靈異外る
と云ふふた。然ばのゝ鋏を
神劔を。尾ふ含免て持あふた。寔よ小縁ハ物よた非ず。ま
あ彼劔の神異おる事も。然ばかアア大死大蛇の身内ふ含
まれ。少ゝも害はれ。ず。て神異を著し。天羽〻斬之劔ハ刃
をさ牙ふ缺と。ふた。最も忌〻し外ど云まくも更おア。此大
刀を遠呂智の尾よた。如何して含持とめと。ちて此大刀
云おと考あり。第七十九段よ注ふを見べし。
ゞ得給ふと。忽ふ天照大御神ふ奉アア給牙アどゐる傳ど

も。凡て誤あり。久しく御許は齋持給へるあと。孫子天葺根神を遣して。上奉給ふるもて知ぢし。委くは第七十九段の傳。まと徴は云へるを見と。○天蓑雲劒是也云く。蓑は牟羅と訓べし。村とも書されむあり。雲氣はあぐ久毛と訓ぢし。靈き太刀を含持あり。祥ふを。居所の上ふ。異し。雲の常ふ立れむは。寔然も有ぢき事ふ。かし。師云。此太刀は事。始ふ伊邪那岐大神の。迦具土神を斬給ひし。御刀は著る血の成る樋速日神。斐伊郷ふ住給ひて。其斐伊川上ふして。今かく大蛇を斬給ひて。其川血は變て流ると云ひ。其尾中を。はと此靈劒を得給ふ。はあと。此彼淡丸由縁あるこの刀。儲まあ彼樋速日神と同く成坐る。

建御雷神の御太刀。石上は鎮坐せむ。此の須佐之男命は御太刀は。同く石上に坐しも。まと由縁有ぬり。○斷は多知と訓ぢし。舊く伎理と訓さるふは從べのらぢ。おき劒を多知といふ語の本ふ。○大蛇之麁王とは。荒魂の義ふ。其は此劒もて。遠呂智を斬給ふ。須佐之男命は荒御魂の功德ふ。きぢれ。○天羽々斬之劒。○天蠅斫之劒。おは二劒は名義いまぢ考へ得ぢ。○大蛇。韓鋤之劒は。纂疏云。韓鋤猶言犁也。劒形類犁故曰。を。今本ふ。カラサヒと訓されど。古本は訓はカラスキと。和名抄農耕具ふ。廣韻云。犁犂田器也。和名加良須岐。まと釋名云。鋤去穢助苗也。和名須岐。をもをの。○在石上は。古語拾遺は。在石上神宮。大和國の地名。和名抄は。大和國山辺郡。石上。伊曾乃加美とあり。師云在

石上を書紀一書に在吉備神部許とも有るら備前国赤坂郡石上布都之魂神社是なりと云ふ宮に一通りて誰も然思へるれど熟思ふに然に非ず其故たしも名高き倭なるをおもて吉備なるを直に石上とは云てむや若吉備のれらば加あらば吉備石上なるべ〜お我云ばけまぢ然まぢなれ倭れ石上なる故し

矢田部遠祖武諸隅を御使として出雲大神宮に藏れる神宝を召上て見さまふ事あり矢田部造は姓氏録に物部氏の別なり物部十千根大連に詔して出雲の神宝を撿校せし終仍て神宝を掌らしむ又同人石上の神宝を掌ること見も然れど此須佐之男命の御剣出雲神宮に藏まり宝を右の崇神天皇垂仁天皇御時なり餘の神宝と共に京に召上さまひて其時とや石上に納ら

れとりて此石上に納ら種々の神宝を納られしと垂仁天皇紀に見えと所以に備前国に遷奉しなる故し其時倭の本宮に名を取て彼を石上布都御魂神社とも申なるいふまを石上布都魂と云名は倭の宮と出ることを明きなやかまバ書紀に拾遺に在石上と云は初倭に坐し時の傳に在吉備と云るは遷宮給ひて後に傳説なるべし然るに備前の石上社傳説は神剣は昔大倭の石上に遷奉て此社に坐まさと云へり有らむ剣在吉備とあるは故に蛇を斬給ひしも宝備前国なる故に簸川といふも備前に出雲に非ず簸川ふに非ずといふ説も信られず

故是以其速須佐之男命宮可造出地求給出雲国而到坐須

賀地而詔出。吾來此地而。我御心須賀須賀斯也詔而。於其地作宮而坐矣。故其地者。於今云須賀也。茲大神初作須賀宮出時。自其地雲立騰矣。爾歌曰。夜久毛多都。伊豆毛夜幣賀伎。都麻碁微爾。夜幣賀伎都久流。曾能夜幣賀伎袁。亦造御室而所宿出處云。御室山。爾喚其足名椎手名椎神而。勅汝等任我兒

宮出首而。於二柱神。賜稲田宮主神云號矣。亦云稲田宮主須賀出八耳神。亦云稲田宮主簀狹出八耳神。故以其櫛名田比賣。亦云稲田比賣命。於久美度起而令產出神名。八島士奴美神。其奇稲田美等與麻奴良比賣命。將產出時。求將產出處而來坐熊谷郷而。甚久麻久麻志枳谷在詔出。故其地云熊谷也。

是以とは。奇稲田比賣を得給へる事を承て云ひ。宮造の事ゐ係へとも。○宮可造之地師云宮を御宅あゐ。宮字を造字の下ゐ

ての意ふ見ばし。ちて此宮造れ。全奇稲田比賣ふ御合坐む料ふ
ぴ。書紀ふ。然後行覓將婚之處とての法。即此の文ふ當る歟
もて知ばし。凡て上代て。婚禮にるふ。先其屋を造ぴし
事れぴ。彼伊邪那岐伊邪那美大神の御時ふも。先八尋殿を見立給しこと思合にべし。○須賀地。
御紀ふ。遂到出雲之清地焉と有て。清此云素鵝と注せぴ。
○我御心須賀須賀斯師云書紀ふ。吾心清淨之をてのり。此
言は。濯く斯伎ふぴ。考くをにぐしきと云て。さぐかしきと云を。同格の語ぶらひふぴ。○源氏物語れど
ふ。須賀須賀と云言多し。そをハ滞れく。速ふ事の行を云。
きむ。此をて本をぴ別意ふ。まさ垢ふれ清きと。滞るこを
ふきと似さきば。本て一意の。れふ此事て。明宮段ふ。須久
須久登を云る言の。今此地ふ來坐ぶれば。御心ちれ洗濯
処ふ。委く云てむ。

ある如く。潔く所思給ふれぴ。今世の言ふ。心の清と云ふ
同じ。出雲風土記て。安來郷神須佐乃烏命。天避立廻坐來
坐此處而吾御心者安平成詔故云安來也。とてのるを合せ
見て。今云此事て。既ふ第六十五段の本文ふ見ゆ。處て異ふきを。事れさ万全
同きを以て。古傳れ意を準へて知ばし。安平成も。心の落
著意れきむ。心の清と云を同じ歟ぞや。然きむ此て。此時の自所思御
心ちを云るふて。俗ふいふ心持ふぴ。全躰れ御心れ善惡
のちだて非ぞ然るを穢惡心性込て。清淨善心ふ変化
給ふ意とれるて。精らぬ説ふぴ。凡ふ漢意ふ溺きとる
学者れ僻をて。や〳〵もれむ万の事を。儒佛の心法て
説ふさむと云ふ。此の御言ふどを狂ふ。今大蛇を斬
て。心れ祓除ふぎ云れるて。痛く強言ふり。
て無上靈劔を得給へふ。此功比類ふきふ因て。自ら御心

ち清くおく成て所思給へるなし。蛇を殺して民の害を除き給ふを以て功とせるを當らば其はゝうの事を此神の御上ゝをりてを何ぞかゝの功よも非じをや。ちて來此地を。其地ゝ係て云へる。此地ゝまゝ淺き所以あるなし。其を凡心ゝは測ゝの多し。抑これ地を奇稻田比賣ゝ御婚る功績を立給ふなき始給れ地ゝ建ば此処ゝ來坐て。御心にゞ〳〵おく所思ゝむも宜ゝざりける。○作宮而坐矣。師云おれ坐字を。上れ到坐れ坐とは異ゝして。住居多万ふと云意おれむ。麻く志く氣流を訓なし。上の麻志の住居あり。下の麻志は嶽辞あり。さて下ゝ祁流と云こを添へるを語れ勢ゝをまゝ。其を祁理と云ゞして。祁流とも云こと。上の其地を曾許爾那母を訓る。那母の結辞れゝ。凡て文章を。如此上下相應ふ辞の格ゝゝおゝとおゝを後世人れ文ハ。こゝを乱て辞のくさゝを知まる人ゝをべてあし。近きところ文章ゝゝる人ゝのまゞ。猶これを知らゞ。○於今云須賀也。師云此地を。出雲風土記を細ゝ考ふゝゝゝゝゝ。はゝゝ大原郡須我山郡家東北一十九里一百八十歩。須我小川源出須我山と見えて。同郡ゝ。須我社も見ゆ。また意宇郡野代川源出郡家正南一十八里須我山とある。此須我山も。卽右の大原郡ゝるを云ゝゝ。須我山を大原意宇二郡ゝゝ。ゝうて其堺ゝゝゝ。ちて同郡熊野山郡家正南一十八里。所謂熊野大神之社坐と見ゆ。かゝまゞ須我山熊野山を。相並ばる處ゝまゞ。共ゝ郡家正南十八里ゝゝゝ。熊野神宮ぞ。卽此須賀宮處れるばき。故思ふゝ。久麻野を隱野の義ゝして。今云久麻と許母理を通ふことを。第三段ゝ注せゝゝゝゝゝ。御歌詞を都麻碁微の由ゝゝゝゝ。

或説に須賀宮地は出雲郡出雲郷にして式に出雲神社とある是なりと云るは伊豆毛夜幣賀伎と云御詞にとれば信るに此説も由なきに非ず然れども風土記に現に山川社などの名に須我と見え又熊野御社など彼此を思ふに猶上の考に依るべし彼杵築大社のあとに今其跡と云処まさに八雲山なと云るは後世の作事なり。さて此神宮は式に意宇郡熊野坐神社名神大とある是なり。今云なる此御社の事は第七十九段に注ふを見べし。○茲大神師云おほ〳〵に始て大神と申せり。下皆同じ伊邪那岐命をも夜見国段の次となり大神と申せり共に故あることなし。さて此は熊野宮に坐まし処を指て申せるなり。若然らば更めて茲に大神と云べきに非ず。於今云須賀と云て其須賀宮に坐す茲大神を云意。かのおのら顕なり。須賀と熊野とは本一つなりしがやゝ後に、その須賀てふ名は近きころの山川に残り、熊野てふ名は神宮に残りて遂に別なるが如くなれる

なり。○初作は師云都久理波自米給ふと訓ても有ぬべけれど茲大神とは此宮に坐とおろを後とて云て是は立返りて其初を云なれば初字を別に波自米と訓べし。○雲立騰矣師云是は此地に宮造て婚坐て吉かるべき瑞なりしか。はさ何の雲とも無れども常に雲ありて何となく立しふても有むかし。古今集序小注に八色の雲の立つを見てと云るは御哥詞に依て云へるなり妄説なり。○歌曰は宇多比多麻波久と訓べし宇多といふ語の由は既に云ゆりき第六段の傳見べし。○夜久毛多都は荒木田久老云彌組立なり。古事記に倭建命の御歌に夜都米佐須伊豆毛多祁流と見え万葉三巻に人麻呂歌に

は。八雲刺出雲子等と云のまば。夜都米も夜久毛も同言ぞと云ふべ。雲と云體言を。都米と云ては。雲ぞとは誰ゝ心得む。まと續紀よ。八裳刺曲を云るをも。併せて考るふ。おれ久毛は組の用言ふて。涙ぐむ角ぐむ芽ぐむ如どの久牟ふ同じく。聚ぞ催ゝ意と聞もまぢ。雲といふ名も。それ組を躰言よれしと る名ふり。彌組立れ意。はと其を都米とも云は。詰ぞふて。今れ言よも。雲の於むと云是ふり。八裳を云ふも彌詰ふり。然れぢ多ゞ。出雲ふかゝ。ふ發語とれみ見るばし。ちて刺と立をは同意れ言よ。たて。今言ふもざし曇とも立曇をも云ふぞ。後撰集歌ふ。いよし子れ野中の清水見るからふ。

刺くむ物て涙ふりろぞ。を有もて。おれ刺と云言を按ふばし。今云記傳よ。夜久毛多都て。弥雲起よて。彼雲の立騰る。を。打見給へる隨よ詔ふる御詞ふり。夜て弥よて。幾重も。立疊ふふ意ぞ。と言まれる。とり精れれぢ。久老説ふ依るふり。○伊豆毛夜幣賀伎。師云伊豆毛は出雲よて。伊傳久毛の傳久を約て豆と れまふふ。此て国名ふて非ぢ。とぐ出とる雲を云ことふぞ。夜幣賀伎て彌重垣ふて。幾重もふふを云ふ。但し此て。宮れ垣を云ては非ぢ。八重雲の立出るを。垣とて云成給ふる れぞ。雲霧て彼方此方を隔於ふを垣ふ似とぞ。上の夜久毛の夜を承て。此夜云。ふお此て契冲法師。加茂翁ふどの説を論ハれとるを。其て洩し於。さて久老云。武烈天皇紀よも。たわきみれ。八重のくみ垣とあぞて。垣ふも組といひ。雲も組む物ふれぢ。かとぐ由有て聞も。くみ垣て。こもぞ垣ふるべし。幣賀伎れ夜多ぢ見べし。○今

けて此御歌詞を以て起して。國名を出雲と賀し。さるから八雲立つと云言も。其枕詞とおれるあり。○今云。此御詞ふとり。國名と為まる事は。第七十六段の末ゆ見えたし。○都麻碁微爾は。夫妻隱ふりて。夫婦隱る料ふと云意おり。凡て都麻とは。夫ゆ對へて妻を云はみおらば。妻ゆ對へて夫をも云稱りて。夫婦の間を互ふ云ふ。俗ゆ都礼阿比と云ふ當まり。此は夫婦をかゝて云る外ゆ。さて微字書紀りは味とあり。其は意いちゝゝ異ある碁微は碁母理の約り。碁味は碁母良世の約ゆ外まばし。碁味のときは。夫婦を隱らせむ料ふと云意おり。○此句を妻を共ゆと云意ゆ見て。稻田比賣を諸共りて。宮造り給ふを云を云る說はりおれば。ちて夫婦隱はと云例は。上久美度の解ふ云るゆ如し。今云。この師說は。第六段は傳ゆ注せる多見た。○夜幣賀伎都久流は。師云彌重垣造ふて。此も

宗は垣を云りて非ず彼雲の垣を成と云こを外ゆ。久老云。垣とは加古免る義おまは。雲を垣りと云ふし。雲の立出るを造はと宣ひしれる説し。今も船人の言ふ西ゆ雲は作ゆし。風吹出ばしおど云り。造るとは云こを雲ゆ由ありておゝ。○曾能夜幣賀伎袁師云曾能は其おゆ。都麻碁微爾の句を承て云ふ。偖かく二度上詞を返して云は。古歌は常おり中頃を以は。此格おは。返て今世の俗は謠歌ゆは常多し。是歌謠の自然は勢を。折返せは。其情深くおは事ぞかし。終は衰は。只助辭ふを。余と云むゞ如し。此格多し。下ふ云べし。衰作ると。上ゆて返る意ゆ似まど。古意は然ふ。ちて一首は意を於ら祢て云ば。今吾須賀宮を造る時しも。八重雲の起を。此立出る雲。八重垣を成せゆ。吾夫

妻隱らむ此宮は料ふ雲も八重垣を作るおそと歌ひ給ふ御卍。凡て雲のうず巻みを云り。然はは妻を隱むと云ふ今吾此宮の垣を造るといふ意なり。此餘は義なはおそし。

和て看たひがことぞとくく詞を味ひ知らむ。明のあらむ。後世は神道哥道は輩此御哥ふくさくの言痛き説を聞け。或は祕事おどおそしくなく云ふ如き説は多くは足らぬまと稲田姫の答哥として有も古躰は多はらぬ後世の作事ぞはと此御哥は。おの袁呂智の事をいひて八重垣造るを警戒の意ぞ御ふもちらは由あきごとと御り。

○亦造御室而云く風土記ふ大原郡御室山郡家東北一十九里一百八十歩云くと見也。おの云くと約とはは卍。即室は和名抄ふ無呂と訓卍。牟呂は寢屋ふを訓と思はるまど総てハ屋を云ふ卍。ちて此御室は須賀宮の事ふて彼宮を造らおく時ふ宿卍給ふは傳ふはべし。内山眞龍ゲ解ふも然云ひ。師も須我山ふ此山も共ふ郡家の東北一十九里一百八十歩とありて相近き処ふまむ。須賀宮は此をを如此傳ふるゥと言れと卍き。此山は風土記抄ふ在海淳郷飛石村山名を石のり。○爾喚云く師云ふは喚を米志氐と訓て下は任字をば多禮と訓ぢし其由は次ふ云。○首は師云都加佐と訓るも誤ふは非祢ぞ。ふは意毘登と訓ぢし大人の意ふ卍。今云諸氏の伽婆泥ゥ首と云あり此は首と同じ其師説は委く第三十九段の傳ふ注せり。ちて此は首は後世の宮く三后宮春宮等は。長官は如くふる殘云卍。○任は多禮を訓ぢ卍由は凡て多理と云辞ふ二ッ石のり。登阿理と氐阿理と は約ま卍とる ふり此はそは登阿理の約れる多理を仰去る言ふる故ふ多礼と訓ふり多礼は即登阿礼卍り。まは此字は拜某官は拜と同く余佐

須と麻氣賜と米須とを。三の訓ある中ふ。余佐須は此ふ叶
たびぐまと麻氣賜とも訓ばらば。麻氣は京を卍他國の官ふ令寵意ふて。即ま
らせを約めて。麻氣とは云ふ。万葉ふ此言多しみあ
副の官ふありて。行こをふのみ云ふ卍。心を付て見ばし。
は。と史記南越傳ふ。天子寵參也とあり。此訓ふて。ケは。麻氣
ト。カラ。せ。ふる事を悟るべし。然るを京官の任をも。麻氣
と訓むたみど。米須と訓ぞ。此は叶ふ。米須は其人を召
卍ごをれり。
來て。其官を授くる意ふて。司召を云是ふ卍。顯宗天皇紀
古天皇紀ふ。任僧正僧都。天武天皇紀ふ。拜造高市大寺司。拜山官推
ふどあり。凡て上代ふは。本居ふ在る人を京ふ召て。官ふ
は任給ふゆし。故ふ召と云し。其名目は後までも遺れり。
古今集雜部の詞書ふ。もろこしの判官ふ免さきて。云く
とあるは。異国ふ遣はふまぎ。まけられて。と有べきを。免
されてと有は。違ふるふ似ときぞも。彼時代は。餘く麻氣
と云名目ハ絶て。凡て米須と云。卍しふ卍。縣召と云も此
ふ同じ。まといはゆふ任大臣を後撰集。栄花物語ふぞ。

大臣召と有るは。古意ふよりかく叶ふる名目ありかし。
卍て。皇国の言は異ふ。ふぞのし。偖此は。上ふ喚とあふの。
此意ふ當る故ふ。此任字は多禮と訓ばきふ卍。○賜云く
云號矣。須佐之男大神の。此名を賜ふ。○稲田宮主神。
師云稲田は。須賀地は舊名ふるばし。故稲田宮とも云ハ
む。内山氏云。稲田は。今仁多郡横田郷の里名。とふれりと云卍。かくまぐ。稲田比賣を云
は。此ふ宮造卍て。御婚坐るを卍。は名ふ。ふばきを。父の初
了名告れふは。後名を廻して。語傳へふる。ふ卍。主は首と
同意ふ卍。須賀は。此了てはは既ふ地名ふ卍。其故は。さ知ふ
吾御心須く賀く斯。と詔ふるはみよては。此神名ふ負せ

給ふはでを有はじれれざおゞ。八耳を。借字。嚴都美くゝ。伊加都と云名の例。おまかまに有れざれゞ。伊加を夜と切る。はと足撫耳を約さ体名おらむの。阿志那を切夜と切る。耳は尊稱おるおと。上ふ委く云体ゞ如し。今云此師説を注せはを見を。第三十三段の傳は注せはを見を。若足撫耳の意れらざ。足名椎ゞ云と同じ。足名椎手足椎を比賣の須佐之男命れ妃は為給ひて。称ゞ名おらむゞ。上は云るを思ひ合はせ。然るをハ耳の文字は就て。口訣ゞ聞。八方称と云るを。此神は更は縁おき漫言おり。まと聖德大子を。八耳と申せる例を引も當らば。彼太子を八耳と申せしこゞ。古事記は書紀は見え。ゞ。れゞおゝおし。をしやさる御名ありとも。彼を豊聰耳と申おまざ。油あゞ。此を比石る事れきをゞ。まと大祓詞一本ふ。棹鹿乃八乃耳云く。と云を引も心得ゞ。此言式は載れるゝを見えば。私事おゝ体ゝ鹿も神も耳多く有るものおゝ。ら祓ざ。八乃耳と云ばき由石らめゞ。

簀狹ハ須佐を。ふ地名。飯石郡ふも有れど。此を其ふ石らば。須く賀を切て須佐と云へるれまざ。即須賀を同じ。上ゝ須賀須賀斯を。須く賀須く賀斯おり。と云へ体を思ひ合せを。○今云杵築大社記は。八重垣神主佐草氏を。足名椎神の後おり。○又云佐久佐社。八重垣明神也。能義郡佐久佐郷は坐ば。本社を。稻田姫素盞烏命。大己貴命を合せ祭る。左右れ社ハ。手摩乳脚摩乳を祭る。當社の神主佐草氏。媒氏とも書ゞ。稻田宮主後也ゞ。○於久美度起而を。上ふ出さゞ。考合ゞ体ば。第六段の傳見べし。○令産之は。宇麻斯米給閉流と訓ば。此を本は。所生と有れゞ。出雲風土記ふ。嬰奴奈宜波比し。貴命而。令産神云くと有を始ゞ。餘の古書は。例多ゝ。る依て記改ゞ。其を生を云こと。男は係て云も常おまど。令産と云ゝと。理正く通もれざおゞ。○八嶋士奴美神。名意は。師云士は知。奴を主美は稱名耳を略ふて上ふ云ゝる例の如し。今云此師説を。第三十四段の傳。忍穗耳命の処は注せるを見を。

ちて此御名を。後ふ大國主神。國造ぱを天下をうしはき坐ふ時ふ。遠祖ふ依ふ故ふ。如此稱ずしふや。若然らばを。八嶋知主とは云ふじくこそ。○奇稲田美等與麻奴良比賣命。此のみを。クシイナダと訓こゑい。本ふ久志伊奈太と書さまをふぱ。名意。奇稲田を上ふ注ずぱ。美等與を。内山眞龍說ふ。如此訓て。古事記ふ。八上比賣者。如先期美刀阿多波志都。雄畧天皇紀ふ。與一夜而娠ふど有を引ふ依ふ。此を前ふを美等與と訓て。御豊の意ふりゑ云ひ。本ふ久志伊奈太美等与麻奴良比賣と書て。悉く假字ふまを。與字のみ訓を用ふぱくも非ゑゑを思へぱしをぱろり。故改き。麻奴良は眞寐ふて。眞處與はし眞ふ寐る。といふ意の名ふ依ぱし。眞龍を。足名推神を。須佐之男命ふ。吾名は云く。妻名を云く。女名を奇稲田比賣と告とれを。眞告ふり。奴と乃と通ふと云へれど。いのあらむ。まと万葉十六ふ。はしとでの熊來酒屋ふ眞奴良比賣。留奴和之。さをひ立云くとある。眞奴良留も同言ふらむの。畧解ふ。また發語ぬらはを所驚ふりと注り。考ふべし。

○將產之時は。美古宇麻牟登斯給布時爾ゑ訓み。將產之處を。宇美麻佐牟處と訓ぱし。○熊谷郷を。出雲風土記ふ。飯石郡熊谷郷郡家東北二十六里云くと見も。和名抄を。諸本とも ふ。飯石郡熊石と誤まり。内山氏解ふ。熊谷は。斐伊川の西岸。上下を熊谷を合せて。一郷とぱを云ぱ。○久麻久麻志枳谷在は。隱かふて。御子生給ふふ。甚宜き處と求得給へふ事を。歡び坐る御言ぱ。在字を那理ゑ訓むを常ふぱ。偖神名式ふ。山城國相樂郡ふ。綺原坐健伊那太比賣神社と云あぱ。此社

此おと考證ふ王手の南平尾村の北ふ綺田村あり今蟹満寺の南れる森中ふ在て俗ふ梶原社と云ゆあり和名抄ふ相楽郡蟹幡加無波多と有り此れ綺の借字ふ有り然ふ依を元亨釈書ふ霊異記ふる蟹れ命を助けて蛇を殺せる二れ古事と須佐之男命の大蛇を斬給ふる古事と を附會せ蟹幡字ふ就て妄て蟹満寺れ縁起を作れり 依

多能登国能登郡ふ久志伊奈太伎比咩神社と云有依れ。

此比賣命を祀ふ依社ふ依し。然れど其祀れる由緣れ今知べからず。

茲速須佐之男大神出御子。都留支日子命。此神出。此處耶。吾敷坐山口處也詔出地。於今云山口。示子国忍別命。此神出。吾敷坐地者。国形宜也詔出處云方結。示子磐坂日子命。此神出国巡坐出時。到坐恵曇郷而此

處者國稚美好。國形如畫鞆哉。
吾宮者將造此處云矣。故云惠
曇。示子衝杵等乎留比古命。此
神出國巡坐出時。到坐多太鄉
而。吾御心者明正眞成焉。吾將
靜坐此處云而。靜坐矣。故云多
太。示子青幡佐草日古命。此神。
於高麻山上。蒔初麻矣。故云高
麻山。於此山上其御魂坐也。又
此神出坐處云大草也。

此段と次段とは。全く出雲風土記の傳を採集先て記せ
ア。○都留支日子命。名意劔ヨ由あはべしとて思ヲど。其
由いまゞ見當らぬ。内山眞龍て、須佐之男命、天ヨて誓坐
はとき、御劔ヨ生坐る神を、かく云傳
ヲとるゥと云れぞ。然て思れ妥。八束水臣津野命、天葺
根神と申ル二柱の名ハ。正ヨ褒雲劔ヨ由ありて、負坐る
名おるを思ふヨ。此神も、彼劔ヲ
由ありて、此名を負給ヲるゥ。○敷坐とて。地をうしは
ル坐を云。祝詞ヲ。敷坐国。敷坐嶋おゞ石はは是ヲア。○山口
ぞて。山ル上口をいふ語ヲア。風土記ヲ。嶋根郡山口郷。郡
家正南四里二百九十八歩と石ア。同記抄ヨ、山口郷、東川津、西川津、川原、西尾四村也と見也。はゝと此條ヲ。布自枳美高山郡家正南七里二百一
十歩。高二百七十丈周一十里。とあはは山ル口を云と。内山

眞龍て云ヲア。同記抄ヨ、此山、跨山口朝酌餘戸、則東川津、嵩也と石り。まと此條ヲ。布
自伎彌社といふ石ア。おて神名式ヨも、島根郡ヨ、布自伎美神社ぞ載さまとア。右嵩
ル頂ヲ在ぞぞ。都留支日子命を祭れるヲて非ざはは。風土
記抄ヨ、合祭布自枳美多気二社於山頂今俗云嵩大神と石り。○国忍別命。名意忍は大。
別て師説の如く。吾君兄の約れはヲて。建き義の名ヲア。
此は既ヲ隱岐国ル示名。忍許呂別の處了注へア。まと別て若と
同言おらむうの考て、淡路穂之狭別ル
処ヲ注へり。共ヲ第八段の傳見るべし。神武天皇巻ヲ。石
押別と云人名も石ア。○宜て延斯と訓ばし。宜を延と云
は古語の常おゆ。○方結は。宜ぞ詔ヲる延てふ語を訛ア
て。由比ぞ云ヲ依故ヲ。舊く結字を書ル也。然らでて、此字を書べき由ヲ

し。本よ。方結今依前用と云ひ。然るゐ今は返りて。加多延和名抄ゐも。方結を書とゐ。ちて風土記ゐ。嶋を呼ふとぞ。其れ下ゐ引く鈔ゐ。方結、片江、浦也。と有もて知べし。

根郡方結郷。郡家正東二十里八十歩と見え。其鈔ゐ。片江、浦也。加僧都王江七類、浦爲一郷。をゐゐ。同郡ゐ。方結、社と云も風土記ゐ見も。方結、社れ。鈔ゐ。片江、浦、伊比都加大神而、祭圀忍別命也とゐゐ。

坂日子命。名義字の如くゐ。坂れ借字ゐて榮の義ゐ。

思ひ定がゐし。若くれ天津磐境ゐ由あるゐ。其れ第百三十五段れ傳ゐ注べし。まと履中天皇の御子ゐ。磐坂、皇子と申に有て。此れ大和、圀の地名ゐ依とる御名と通もまぎも。此神名ハ。其地名ゐ依れりとも所思え。○圀巡之時とれ。圀くを作堅ゐ。巡見給ふ由ゐ。

を。須佐之男命れ。天壁立極廻坐とゐる處ゐ既ゐ注ゐゐ。

第六十五段の傳見べし。○恵曇郷れ。秋鹿郡ゐゐ。風土記ゐ恵曇郷、郡家東北九里三十歩と見も。同記の鈔ゐ。江角古浦武代本郷也。蓋意佐田、宮村、可亦以入此郷と。ゐゐ。○圀稚れ。久邇伊志久を訓ふし。神代紀一書ゐ。圀稚地稚とゐるを。クニイシツチイシを訓るゐ依れゐ。伊志久は。宇比志久りて。宇比れ伊比を約まゐ。初志れ由ゐり。初し。初れ稚き意をもて。此宇を書ゐと見も。古事記の初発ゐる圀稚を。師れクニワカクと訓れさまど。宇らば。○美好れ二字ゐて。宇流波志久を訓べし。○畫鞆。鞆れ上ゐ出て委く注ゐゐ。第三十二段の傳見べし。畫を恵と云は。繪字の音外ゐと師説も有れど。舊を。ゐれ古語ゐるゐを。此御言ゐ依て知られゐゐ。文字書ことれ舊をり有り。人形造るゐとゐぎも。いと古く有しりむ。画を書くゐざもゐぎりゐ無らむ。然まど

惠てふ言は義も未考へ得ず。鎌倉云、こは後の古史本辞経の委く考ふ記されとり。ち多畫鞆とあるは、神世ふ畫多ふ鞆の製あるを其ふ如と
ふ由ふふ法ふし。江次第あどの鞆繪と云ふと有て、常の巴字をかけど、其を異あり。鞆繪は画を書とらぐ。○惠曇は風土記の本字惠伴と
繪あり。画鞆は画を書る鞆外ア混ふべらら
見え。和名抄の惠曇と
のみ有て訓はあし。同郷ふ惠枵毛社と云も有ア。抄ふ
惠曇郷中朝日山七社中也と見
も。磐坂日子命を祭る外ふべし。此等の依て訓ふし。枵毛の曇
字を書とるは。ドンの音は韻を
モ。字の省略の轉用ふふ。◉衝杵等乎留比古命は杵
字あり。と師説あり。衝杵は杖桙ふて等乎は拆竹之登遠く登遠くは
登遠と同く撓む義ふる法し。留は万葉二卷ふ奈用竹乃
騰遠依子を連と法余流の余を省は法語ふて国作ア巡

見給ふ。杖給へ法桙は撓むだかア長き由をもて稱ふ
と法御名ふるる。神等の国巡りふ。桙を杖給へ法と、第九十六段ふ注ふ。天嗣桙命八尋鉾長
依日子命と申は神
名を思合ふ法し。はと若くは杖桙の徹ると係と法御
名ふ。徹は徹トホルふ。仮字違へアと疑ふも有べ。れ
ど疑を許遠呂と云る例ふ。冨遠相通は云ふら
むふし。まと式ふ陸奥国磐瀬郡ふ桙衝神社と云ふり。何
ふる神ふや。○序ふ云は。大島郡
云く古老傳云昔素佐鳥尊御子衝桙等乎而留比古命巡
行此国詔吾御躰衰坐詔而靜坐故云於止利今謂大島者
訛也と云は。出雲風土記を学び作れる漫説ふり。乎留
の間ふ。彼風土記も而字錯りて入まるを右文ふ其誤字
さへふ。其まく入とる
は。いと嗚呼ふりふし。○多太郷同記ふ秋鹿郡多太郷郡
家西北五里一百二十歩と云ア。和名抄ふも秋鹿郡多大
岡本大垣二村也今岡本与とありさて風土記抄ふ。
秋鹿村之堺也と云ふり。○国巡は上ふ云ふ法如く国

作巡見給ふ処卍。○明正眞成焉は。阿加久多陀斯久成奴
を訓ぜし。本よれ照明正眞成と有を師ハ右ろ訓れとり。前ふ須佐之男命れ安
來郷ふ渡來坐して吾御心者安平成焉と詔ひ須賀地ふ
到坐て。我御心須く賀く斯と詔ずるよ同じ。○靜坐とて。
他ふ知られ安隱めて。顯れ給てぬを云。委くれ第百二十三段大国主神の
長隱鎮坐ル処よ注ふべし。同郷ふ多太社といふ〻二社あ卍此神れ
鎮坐る處ふ〻ぜし。抄云。多太両神れ。多太郷岡本村。○青
羽島大神。支田大神也といへ卍。○青
幡佐草日古命。佐草を。まと佐久佐とも書あり。名意青幡れ青畠佐草は
麻草れ阿を省けふよて畠ふ麻を蒔初給へふ由の御名
を聞も。幡れ借字あり。はと佐れ眞よ通ふ佐よて佐草と
は麻を称とる語よも有べし。眞竜れ青幡れ冠辞

ふり。万葉集よ。青幡之忍坂山。まと青幡木幡とも連けと
ふれを思ふ。佐久左の佐れ発語よて。青幡の如く靡く草。
と連々しふり。草れ多き中ふ菅をさ去
を云へり。然れど此れ故事よのふはず。○高麻山れ。多加
佐山と訓ぜし。高ふ阿の韻有れど卍。高天原ふど の例れり。本ふ
大原郡高麻山郡家正北一十里二百歩。高一百丈周五里。
北方有樫椿等類。東南西三方竝野と見も。抄よ在八代郷三代村俗曰高
塚山と
あり。○蒔初麻矣云く。此御国の地ふ麻を蒔と ふれ初ふ
卍。其れ高天原よは。大御神れ岩屋よ幽居せる時ふ長白
羽命の種給ずまど。葦原中国ふれ種ざ卍しゝば。此神の
今初矣て種給へふれ卍。其れ須佐之男命五十猛神れ種を持降り給へるゝ。まと此神の
採て降給へるゝ。何ふまき。種の源れ高天原をり出とる
こをれ疑ふし。然るれ是はと。豊宇気神の徳ふ生れる事

た違無れば有り。ちて麻を蒔とる高山ある故ふ。高麻山とた賀ふ也れむ。○於此山上其御魂坐也。本よ矢代社を云ふの也。此を鈔ふ。坐屋代郷三代村高麻山。青幡佐草日子命也。俗云高塚大明神也と云ふ也。○此神之坐處とた現世ふ坐ませ法間住居法處を云れめ。○大草た。本ふ意宇郡大草郷郡家南西二里一百二十歩と見え。和名抄よも意宇郡ふ大草と見め。風土記抄よ。大草日吉岩坂大庭佐草四村也とあり。眞竜云佐草日子命坐ば故よ地名ふ賀とまバ舊た佐草と云れむを。郷と成し時ふ大草を改免しあるべし。同郡ふ佐久佐社を載と也。此た神名式ふも意宇郡ふ佐久佐神社と載られと也。今も佐草村と云よ坐とし。鈔よ見め。此社た。国史よ。仁壽元年九月乙酉青幡佐草壯丁命授従五位下。まと貞観七年十月廿八日出雲国左草神授従五位上。はと元慶二年三月三日出雲国正五位下青幡佐草壯丁神正五位上あど見えとり。ちて都留支日子命と也。佐草日古命まで五柱神ふち。誰も風土記ふ多く須佐乃乎命御子と有也て。御母の名た傳たらば。たと其有し事をも。或た国巡坐之と云ひ。或は徒よ此處ぞ云く。此處た云くれぞ詔へ法由れみ記し傳へて。国作堅給ふとは言ぢまとも自然ふ。其事を外く。国巡也と云と也。想像也て。作堅給ふる趣よひく。知て通めるは。古書の傳れ。いと朴畧ふ。妙ふ法物ぞ有れ法。ふ。此神等れみあらば。国作り固給へふ法。斯て神たいと多くり。次くよ注ふを見る法し。此神等を始免。次く此神等も。国作巡也給へ法事た。悉く

須佐之男大神の神御計(カムミハカリ)を巳けり。其由下に委く注ふ。第九十一段の傳見るべし

茲健速須佐之男大神。以佐世木葉爲頭刺而。踊躍出時。所刺出佐世木葉出墮出地。云佐世。亦至坐須佐郷而。此国者。雖小国国處也。故吾名者。不著木石。詔而。即鎮置己命出御魂而。定給大須佐田小須佐田矣。故云須佐。即有正倉。亦詔朝御餼勘養。夕御餼勘養。五贄組出處而。

定給出處云朝酌鄕也。

佐世木。契冲云。此は烏草樹ふや。和名抄よ。楊氏漢語抄云。烏草樹、和名佐之夫乃紀。辨色立成、説同。と見え。字鏡ふも。烏草樹、左之夫。まと樝、左世夫とも有り。今山里人は。ちせぢの木を云。柃ふ似て小花。実有り。熟せまだ。紫の黑みとなやうよて。童れどは取て食ふとぞ。柃は和名抄よ。比佐加木と見えて。今俗イ毘左く紀を云。木ふ。を云ふり。記傳ふ。仁德天皇は御歌ふ。佐斯夫能紀と有る。此處ふ。此説を採りて。或人烏草樹は。今俗よちく。ぶれ木とも。ちやく。ぶれ木とも云を云。倭姫命世記ふ。佐

佐牟乃木、枝と有るふも是ら。を有り。眞竜も此、説よ依て。遠江人は。そゝの木と云。此、木の葉を春きて。其汁をもて衣を染るよ。茜は色は如し。古事記は歌よ。曾米紀賀斯流迩。斯米許呂母と有る。曾米紀は。即さしぶの木よて。遠江人のいふ。そゝの木なり。と云へり。○大社記ふ。大社は末社よ。佐く布、社を云有て。其本地を知らば。白石より西十餘町ふ。○頭刺は加邪斯有りを見も。此よ由有るゝ考ふべし。

を訓ぢし。和名抄ふ。簪、和名加無左之を有り。髮挿の義ふて。頭の飾ふ。伊邪那岐、大神の黑御髮、天宇受賣命は日蔭、鬘ふど有も。云もて行ば頭は飾ふて。頭刺ふ同じ。梅櫻柳桂葵榊。そは餘も。何ふても頭よ挿は。皆頭刺と知ぢし。れ。ふ景行天皇、巻倭建命は御哥ふ。久麻加志賀波袁宇受、尓佐勢、とふる処よ注ふ師説を見るべし。○踊躍之時は。本よは踊躍為時と書さり。万葉十九巻ふ。榲野爾左乎騰

流雑とあるよ依て。袁杼理斯多麻布時爾と訓ばし。字書ふ。踊音勇。躍音藥。跳也進也。跳舞貌なぞ有て。心のいと清浄く。手伸く覺もは時ふ爲らは〳〵態ふて。舞を舞ふをは。心ぞ別ある物ぞ。其た舞た。憙きよも悲妃ふも。舞る〳〵伎。踊は悲き事れ有てハ。得爲られ無態ふ。亡。おた其趣と人情をを。く思ひ通し。て辨ふ侘し。須佐之男大神。前よた荒御魂の進びて。忌去妃枉事ども起し給ふは。を解除の驗ふを。て御心和み。清〳〵しく成坐る故ふ。其勇みれ餘りよ。踊をも爲給へは事と知られ有。○佐世木葉之墮之地云佐世踊た手を伸し足を舉げ。頭を振り飛走もける態ふは故ふ。頭刺

れ木葉の墮ある。れ。風土記ふ。大原郡佐世郷。郡家正東九里二百歩と見も。和名抄よも。大原郡の郷名ふ。佐世とあり。同郡よ。佐世社も。ものア。鈔よ。佐世郷加刺大明神也を見も。まと佐世郷。神上佐世。下佐世。大谷。飯田。餐加等五所也とあり。神名式ふ。大原郡ふ佐世神社とある是ふ。○須佐郷た。風土記よ。飯石郡ア。須佐郷。郡家正西一十九里と見も。和名抄ふ。も。飯石郡の郷名よ須佐とあり。朝野群載六ふ。出雲国言上。管飯石郡須佐御牧を有れど。古くた牧も有しふ。風土記。抄よ。以宮内為郷標併朝原。反部。原田。入間。竹尾。穴見等為須佐郷とあり。眞竜云。須佐郷た。神門郡ふ隣る。山口。伊秩。乙立ア通ふ路ふり。まと多。祢の郡家へも通ふと云へり。○此国とた。須佐郷を詔ア。今世ふ里と云ばうアれ地をも。古た国をぞ云けは。此例今數ふは了。暇あらば。○雖小国は。佐波伎国那禮杼

毋と訓べし。佐波伎た勢婆伎と云ふ同じ古言ふて。少し舊く聞えと已。神代紀。少小おぞの字を。今本ゴ世バキを訓とるを。古本ゴたサハキと訓う。鰭之廣物鰭之狹物おど石の條。狹と同言おり。大國小國と云こを有まぜ。其小國をた少ゴ異ふ已。○國處也を

は。小地ゴた有れど。最好國ふ已と。稱給ふ條御語ふ已。今世の語ゴも。好と云こをを言はで。徒ふ木也。○吾名者不著國也ふど云て。称る意ゴ聞ゆる語多し。

木石をた。木石を書條た漢文ふ已。伊波伎と訓べし。吾ゲ御名をだ。石木の類。由れき物ゴた負せば。御田の名ふ負せて。後世ふ遺し給むと詔ふるふて。謂ゆ條御名代の事ゴ起ま條原ふ已。御名代の事た。仁德天皇巻ゴ委く注ふべし。○鎮置已命之御魂た。須佐地ふ祠を建て。鎮置給ふ為由ふ已。次ふ有正倉と云條即是ふめ。

あゆ其下ゴ注べし。自身ゴ魂を祀れる例。ふ〜ふ始ゆて見えとめ。

○大須佐田小須佐田。ふた大神御自ゴ御名を負せて。定給ふる御田ふ已。大小は。大國小國大忌小忌ふど云。大小をた異ゴて。稱辭の大小と通え為已。然るた。國ゴ大小と云ひ。忌ふ大小を云は。正ゴ大小ゴ由あるを。此大小た由ゴ聞ざまぜれ已。抑田は。稻種を殖る所ふし為。其種はも。豐宇氣神ゴ御身ふ。始ゆて成出と條物ゆ為ふ。此大神。前ふ荒御魂の進び給へ已し程た。痛く嫌ひ給ひて。岩屋戸段の枉事は爲出給ふゆ為を。彼解除ふとめて。御心直已。彼神ゴ御身ふ成ま為種ども持下ゆ給ふ條中ふ。此をも持下給ひゴ。今かく御田を定ゆて。殖付け。

其田ヨ其御名を負て。御名代とさ牙爲給牙ふ亦ア。○正倉ム。富久羅と訓べし。卽祠の義ル。今ヨ正倉と云こを有て。義解ヲ正倉者正税とアるを以て。此ヨも彼と同じおとヨ思ふ人も有れど然らば。出雲風土記ある。は凡て祠の事を見ばてム通え共。正税の倉ム。然ムくり彼國ヲ多うるべき由おく。殊ヨ有社と云べき所ヲのみ卽有正倉とあふ此卽字を也思合せて辨ふばし。神宮を保久羅と云し例ム。垂仁天皇紀ヲ。五十瓊敷命。その妹大中姫命ヲ。石上神宮の奉仕を讓ア給ひし處ヨ。大中姫命辭曰吾手弱女人也何能登天神庫耶。五十瓊敷命曰。神庫雖高我能爲神庫造梯。豈煩登庫乎。故諺曰天神之神庫隨樹梯之。此其緣也。神庫此云ヲとアのア。此保久羅。の正倉ム。おム神庫字の類ヲのけふ。義訓の文字と知るば し。富久羅ム。久羅ヨ富ム添りとる語まと洞を富羅と云ハ。富久羅の久ム省りア亦ふ語おるべく所思也。富ム含まりとる義。久羅ム隱りおることル。○津國嵬原郡ヲ。保久良神社と云あり。いりれふ神ヨや。ちて此正倉は。風土記ヲ。同郡ヨ須佐社とアのふ卽是ヲア。須佐鄕宮内村ヨ在て。大宮大明神と云ふ。おま須佐能袁命社おりと。風土記抄ヨ見也。神名式ヲ。飯石郡ヲ。須佐神社を載されとア。○朝御饌勘養タ御饌勘養ム。朝美祁能加牟加比。夕美祁能加牟加比と訓べし。朝タは。ユ。フ。ベ。ノ。やも訓べし。師ム然訓れとり。今ム加茂翁の訓ヨとまり。アサはアレタの約まるおり。此詞ム祈年祭ヲ。水分神等ヲ白ル祝詞ヲ。皇御孫命能。朝御食タ御食能加牟加比云くやアるると。此やれみおア。祝詞考ヨ。是ム朝タ御食料の神顯と云おり。加比ム。稻穗の名おまど。米れ事ヨもいふ例ル。と說まおまど。師說ヲ。加

牟加比の加は。宇迦之御魂なぞ云。宇加は宇を省れば也。て食なり。食も宇氣の宇を省れば也。加と氣をは一ツ也。酒を佐加。竹を多加とも云如く。宇氣も上よりなる時は。宇加をもいふ。牟加比は。万葉の歌に。御食向とを免る向ふて。神よ物を手向ゝを云も同言なり。牟久流を云は。今向ふを。奉ふ方をは云詞。牟加布は。其を受給ふ方をは云詞なれど加牟加比は食向ふて。御膳に就給ふを云と有り。然るバ此の勘養は借字よりて。勘は字音を用ひ。養は訓を用ひたるなり。須佐之男大神。已命れ朝御食夕御食は食向云ゝを詔ふるなり。○五贄組之處。五は嚴の借字ふて。神武天皇卷に。火名嚴加具雷。水名嚴彌都波女。粮名嚴宇加能女。薪名嚴山雷。草名嚴野椎。とある嚴に同く。清明きを云詞なり。贄は新饗をり轉れば詞よりて食物の事なり。新嘗のことハ。第四十二段の傳に注し。贄は事は。第百四十一段。速贄は下に注べし。組とは今世に。某組組合などと云詞と同く已。命れ嚴御贄を掌る組人の住處と定給へる由なるべし。○朝酌郷。は朝御餼云ゝ。組之處を詔ふ也。朝と組をを取て。里名と爲とは也。和名抄に此字を書とり。

風土記に。嶋根郡に。朝酌郷。郡家正南一十里八十四歩。熊野大神命云ゝを云て。此故事を記せり。同記抄に。朝酌。福富。大井。大海埼四村也。從意宇郡間。渉渡福富之村頭。曰朝酌。促戸とあり。眞竜云。郡家は抄に。相當本庄新庄之中原を云れを。古今道同じ。うらべ。郡家は本庄なるべしを云。

上社同下社と二社あり。抄よ上社祀伊弉冉命朝酌郷大森大神也下社同郷多賀大神而合祀伊弉冉命与熊野大神也といふ。

○門人岩崎長世北原信質櫻井光房ら云ふ。此の十五社巻を櫻木ふきらせて松のねぶりよ句は安原氏科野国伊那郡飯田城の法ふ家を原人あち奥村邦秀ぶ母刀自奥村ふさ大原正敷ぶ母とじ松村きそ櫻井盈壽ぶ祖母の刀自櫻井あ起三人のたみれ(老女)のおとぢよおそ。

177
B
361